

純粹で最強な九尾ちゃんと怯える飼い主

臆病者の呪術師

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

呪術師、それは夜に跋扈する化け物……妖や怨霊と戦う者達の事である。

呪われたり、喰われたり、憑依されたり、苗床にされたりと危険極まりないが、その分報酬が高く、強くなればその分富が増える……というのが呪術師という職だった。

そんな呪術師の一人、クラマには悩みがあった。

それは自分の持つ式神が、ある時を境に自分の制御から外れてしまったのだ。

これは

一歩間違えると世界を滅ぼせてしまうような強さの式神ちゃん×2を

もし失望されたらどうしよう、という怯えの中で頑張って手綱を握ろうとするクラマくんの奮闘記である。

※なお式神ちゃん達は絶対的な忠誠を誓っているがクラマは分かっているものとする。

目次

登場人物紹介（随時更新予定）	1
つよつよな味方は手綱がないとただの爆弾	7
圧倒的な力（外付け）を手に入れた場合、自分が暇になる	11
同僚という存在は有り難くもあるが、時に厄介でもある。	15
IF もしもクラマがしごかれなかったら	20
狭い所で大怪獣バトルをすると被害が甚大	26
皮肉の地の獣	32
お気に入り1000件記念小話 とある日のキンコとギンコ	35
クラマは妖怪タラシ？	40
お気に入り2000件突破記念 もしもクラマが強かったら	43
少年と猫と主	49
お気に入り3000件突破記念 とある二匹の小狐の話	57
新年の呪術師達	60
不穏な山 前編	64
不穏な山 後半	67
動けずのクラマ	71
よくある結末	74
お気に入り1000件突破記念 あるじサマを探す者	77
都の異変	80
狸の化かし	84
狐の策略	87
後処理が一番面倒だったりする	91
満ちる犬神	94
外の化け物の商人、異形の運び屋	98

登場人物紹介（随時更新予定）

クラマ

本作主人公にして、呪術師としては異例な九尾を二体従える呪術師。

しかし従えているのではなく、キンコとギンコの二人が忠誠を誓っているだけであり、式神の契約は切れている。

クラマは現在の自分の強さを中の中程度と思っているが、実は中の上程度にはなっている。

基本的な戦闘スタイルは符や札を大量に用いた妨害や攻撃などの質量で削り、最後にキンコとギンコに狩ってもらおうスタイルだった。

現在では結界を張ったらキンコとギンコが突撃して殺して来るので、符や札が余る機会が増えた。

その為、他の人が使えばいいよね。と新米や中堅の呪術師達に配っている。

お陰で新米や中堅の呪術師達の死亡率が下がった為、大屋敷の長から結構感謝されていたりする。

体術はからつきしだが素早く動けるように体は鍛えている、シツクスパックは出来上がっていない、4パックである。

キンコ

クラマの式神、金色の方。

九尾として高い妖気に高度な妖術、そしてクラマから教わった呪術も使えて体術も完璧な超凄い九尾ちゃん。

なお九尾としては稀な固有能力を持っており、クラマが死にかけた時に発現した。

その固有能力は土地を殺して不毛に変え、命を全て燃やす業火と大切な者を癒す治癒の力。

しかしこの固有能力は、自分とクラマとギンコ以外には基本的に使わない。

一応シユリ達が死にかけていたら使つてやるか、とは思っているがシユリ達がズタボロになっているのが想像出来ないので要らないかもと最近はある思っている。

クラマが大好きで心の底から愛しており、邪な妖を全てを滅ぼした暁にはギンコと共にクラマを連れて山奥へ行き、そこでクラマに妖術をかけて不老不死にしてそのまま永遠に愛し尽くすのが夢。

そんな事を考えているが純情で恥ずかしがり屋、クラマから触れられただけで頬を赤く染めてモジモジしてしまう。

しかし『ある期間』にはそんな気持ちが消し飛ぶのでその期間中は肉食系になる。

ギンコ

クラマの式神、銀の方。

キンコと同じく九尾として高い妖気に高度な妖術、そしてクラマから教わった呪術も使えて剣術も完璧な超凄い九尾ちゃん。

ギンコも固有能力を持っており、その力は全てを凍てつかせる冷気と大切な者を守る為に全てを断つ力。

ギンコは冷静沈着で、勝つ為やクラマを守る為になるなら遠慮なく固有能力を人に使う。

しかしそれで感謝されるまでは許せるが告白とかされると寒気がして相手を凍り付けにする。

キンコと同じく、クラマが大好きで愛している。正直に言えば今でも許されるのなら食べたいくらいらしい

その為、クラマから触れられればウキウキしながら逆に襲おうとする。

なお『ある期間』においてはそんな気持ちが逆に鳴りを潜め、嫌われないかと不安になってしまう。

しかし、クラマが一言『大丈夫だよ』と肯定した瞬間に肉食系と化す。

スイコ

キンコとギンコがとある世界で融☆合した存在、今はクラマの式神

…という扱い

保有する妖気だけでも大妖怪達を大きく上回り、簡単な術を行使しても込める妖気を増やして無理やり追加効果を増やす事が出来る程。

6本づつの金と銀の尾に、金と銀がまだらになった髪、そして金銀のオツドアイとキンコとギンコの特徴が混ざっている。

固有能力もしっかり持っており

敵を燃やし、味方を癒す黄金の炎に、敵を切り刻み、味方への様々な支援が出来る銀の風。

更にそれぞれの尾に対応した武器を隠し持っており、敵に応じて尾から武器を出して攻撃出来る。

因みに武器自体は世界を見るついでに盗んできた物

クラマに対する気持ちは『愛』、クラマが幸せなら自分やキンコやギンコ以外にツガイを増やしても許すくらいには心が広い

最初は別世界とは言え自分自身でもあるキンコとギンコにどう接すればいいのかと悩んでいたが共通の話題クラマの事で話が盛り上がり、現在では関係良好。

最近では三人でクラマを誘惑しようとおれこれしているものの、元はキンコとギンコな為に空振りしまくっている。

なお『ある期間』が来たとしても通常通りに動ける為、暴走するキンコとギンコを抑えられるし、キンコやギンコが動けない時でもクラマは仕事が出来るようになった。

シユリ

クラマの同僚兼師匠、呪術師としては元から才能があり、クラマと共に仕事をする前から妖怪を蹴散らしていた。

クラマを目の敵にしていたが、突っかかってやろうと仕事を一緒に始めてからはクラマの優しきや自分を顧みない自己犠牲の精神にすっかり堕ちた。

本人は認めていないが、クラマへ多少の恋心を持っている。

基本的な戦闘スタイルは拳や蹴りによる粉砕。

自分の一撃でも粉碎出来ない相手が出れば、シユラとモミジへバトンタッチして支援に回る。

なお、スタイルも良く他の呪術師から告白される事もあるが『私より弱そうな奴に興味はない』とバツサリと振っている。

夢は鍛え上げたクラマと本気で戦う事。

しかし、本気でやると大屋敷が余波で消し飛ぶ為、良い感じに壊れてもいい場所ないかなと最近の仕事ついでに探している。

シユラ

シユリの式神、パワーキャラな見た目してるのに能力的には万能タイプ。

敵が来たらとりあえず殴る、殴っても死なないなら術と共に殴る。それでも無理なら固有能力を使う。

そんな三パターンの思考回路をしている。

シユラは鬼でありながら固有能力を持っており、その力は地獄の獄卒を現世に召喚し相手の罪に比例してボッコボコにする固定ダメージと数の暴力による殲滅。

なお地獄の獄卒というのは妖だろうが熟練の呪術師だろうが本来呼べない程に強く、一体が現世に現れただけで閻魔様が現れて説教を始める。

しかしシユラに呼ばれる獄卒達は、彼ら曰く『暴れ足りないなら行ってこい、ただし迷惑はかけるな』と閻魔様に釘を刺された暴れん坊達であり、本人達も悪人を遠慮なくボッコボコに出来るのでストレス発散になると感謝している。

モミジ

シユリの式神、純粋なパワーキャラだが搦手もやれるタイプ。

敵が来たら術を試す、効くようならそのまま術主体で攻める。効かないなら殴る。

殴っても止まらないなら固有能力を使う

シユラと似たような思考回路で戦う鬼

そんなモミジの固有能力は炎を操るといふ簡単な物。

しかしその炎は鬼火であり、火力を上げれば妖の群れを一瞬で消し炭にする程度には強い。

舞を踊りながら自身の周りに鬼火を出現させ、油断した相手の足元から業火で焼き尽くす戦法がお気に入り。

その鬼火と舞の美しさから、芸者に誘われたりもしているが、断っている。

セイメイ

呪術師が生まれて間も無い頃に誕生したクソ強呪術師。

悪行を成す呪術師をサクツと殲滅して、現在まで続く組織を作った創設者。

なお、呪術によつて不老不死になっており、現在も存命中。

セイメイ自身も式神を複数体所持しているが、どういう式神なのか全く知られていない。

実はクラマを呼んだ張本人でもあり、キンコとギンコが小狐の頃から九尾になる素質がある事を見抜いていた。

最近は書類仕事が辛い為に、自身の式神に丸投げして、何処かへふらふらと渡り歩いているらしい。

同僚にドーマンという呪術師がおり、自分と同等の実力があると高く評価し何度も自分の所へ来いと誘っているのだが、ドーマンからは『お前の作った組織に入るくらいなら根無し草のままが良い』と断られている。

なおドーマンも呪術で不老不死になっており、外でふらつくセイメイを見かければ溜息を吐いてセイメイを引きずって酒屋へ行き、酒を飲み交わす程度はするらしい。

とある日の酒の席で、ドーマンとセイメイは『揺らぎ』を感じた時があつた。

その『揺らぎ』は二人を警戒させる程であり、その日以降ドーマンはあれほど嫌っていたセイメイの元へ治まり、その『揺らぎ』を警戒している。

セイメイは最初はドーマンが来た事に喜んだが、書類が嫌だと逃げ

ようとしてはドーマンに捕まる羽目になるので最近は少し落ち込んでいる。

しかしそんなセイメイを見かねてドーマンは偶に酒を飲み交わしに行くので、セイメイが暴れるなんて事は起きていない。

ドーマン

セイメイの同僚、発音的には『ドウマン』なのだが堅苦しいのは嫌いなのでドーマンと皆に呼ばせている。

セイメイと同等の技量を持ち、複数の式神も保有している。

しかし根が真面目なので、見た目的に真面目に見えてめんどくさがりなセイメイの手綱を最近握っている。

しかしドーマンは無類の酒好きなので、酒に釣られてセイメイを逃すと言うのが最近増えている。

『セイメイ、やり方が汚いぞセイメイ』と言いながらも、酒を飲みながら置いてった書類を書くのが最近の光景である。

つよつよな味方は手綱がないとただの爆弾

「おお、クラマ様だ！」

「あれが、九尾を二体も従えたと言う呪術師か！」

人々はクラマと呼ばれたその男と…側に控える女二人を見てコソコソと話す。

クラマは所々白が混じった黒髪を風に靡かせて、澄まし顔で歩いている。

側で控える女二人は頭に狐の耳と腰に豊かな九本の尾を生やしており、それぞれ金髪と銀髪を風で揺らしながら男の半歩後ろを静かに歩む。

クラマを見れば、周りの人々は静かに道を開ける。

そうして出来上がった道を、クラマはスタスタと歩む。

そうしてモーセのように人が分かれて行った先にある己の自室へと辿り着くと自分をジロジロと見る者達へ告げる。

「これより、私は休む。何人たりとも、邪魔はするな」

そう言っつて自室の襖を開け、中に入る。

続いて女二人が入ると人々へ頭を下げて、襖を閉じた。

クラマが自室に籠ったのを確認した人々は、談笑や情報交換などを再開し始めた。

談笑が聞こえ始めた頃、自室に入ったクラマは

「はああ…疲れたあ…」

布団の上にダイブを決めて、溜息を吐いていた。

そんなクラマの元へすすす、と二人は近寄り甲斐甲斐しく手足を揉み始める。

「お疲れ様ですあるじ様」

「あるじは頑張った、いっぱい労う」

「あ…ああ…ありがとう、キンコ、ギンコ」

手足を触れられ、ビクリと震えたクラマは顔を見せないように伏せつつ、二人へ礼を述べる。

「いえいえ、『式神』として当然かと」

「そう、私達はあるじの『式神』これくらい当たり前」

それを聞いたクラマは内心で嘆く

(その式神の契約、破れてるんだけどねえええ…！)

クラマは心の中でそう呟くとそのまま天井を見上げる。

(なんでこんな事になったんだろうな…)

そう思いながら、クラマは過去を思い返した。



そもそも『式神』というのは呪術師が自分の技量で制御出来る妖怪を弱らせるなり、説得するなりして作るモノなのだ。

クラマは呪術師になりたてだった頃、親から『式神』を二つ作ってくれば良いと言われ親を喜ばせようと手頃な妖怪は居ないものと辺りをふらついていた。

「ん？」

そんな時、ふと草むらの中で弱っている二匹の狐妖怪を見かけた。

二匹はどうかやら『生まれたて』のようでもそのまま放置すれば死ぬのは新米呪術師のクラマでもはつきりと分かった。

クラマはこれならちようど良いか、と二匹へ二枚の札を向けた。

弱った二匹は抵抗すら出来ずに、札の中に吸い込まれる。

いい拾い物をした、とホクホク顔で帰路を行くクラマ。

しかし、クラマはこの時に致命的なミスをした。

そしてクラマはそのミスを知らずに、五年間を二匹の式神と共に駆け抜けた。

そして、二匹の式神はメキメキと成長した。

そして二匹が九尾になった日に、クラマは違和感を覚える。

ぷつり、と二匹との繋がりが切れたのだ。

その感覚に、クラマは血の気が引く。

そもそも、式神とは自分の技量で制御出来る強さの妖怪を式神にして制御する術なのだ。

本来なら、自分の技量を超える強さにならないように呪術師は式神に対して強さの上限を付ける。

しかし、クラマは新米だった頃にロクな教育を受けずに自分で勝手に式神を作ったのだ。上限を付けるなんて事を知らずにやった為に、こうなってしまった。

式神と契約が切れた以上、二匹はクラマの制御の外だ。

走馬灯のように、クラマの今までの人生が頭の中を駆け回る。

二匹を一生懸命に世話したり、強敵と対峙して倒したり、人型になれるようになった二匹へ人のルールを教えたりと色々あった。

そんな思い出が頭を駆け巡った後にクラマは現実に戻される。

注意深く二匹を見れば、手を握ったり開いたり身体を動かしたりと自分の身体の確認をしている。

もし叛逆された場合、妖怪の中でも高位である九尾を二匹も世に放つ事になってしまう。

しかも九尾はただでさえ強いと言うのに、個体によっては妖術や呪術以外に固有能力を保有していたりする。しかもその固有能力によつてはそれ一つで天変地異を引き起こせる物もあるのだ。

身体の確認が終わった二人は、じつとクラマを見つめながら近寄つて来る。

クラマはせめて最後まで足掻こうと札を構えた。

しかし、二匹から放たれた言葉は意外なものだった。

「ああ、やっと私達を信頼して下さったんですね。あるじ様」
「妙な枷がやつと外れた、これで全力が出せるからもつとあるじを守れる」

「…へ？」

にこにここと笑いながら己へ腕を絡ませる二匹に挟まれたクラマは、ただ茫然としながら空を見上げた。

空はとても綺麗な夕焼けであった。



そんな過去を思い返してクラマは手足をキンコとギンコに揉まれながら思う。

(コイツらに失望されたら終わりだ…何とか耐え続けなとな…)

そう決心するクラマを見るキンコとギンコはただマツサーズをしながらニコニコと笑顔を向けていた。

圧倒的な力（外付け）を手に入れた場合、自分が暇になる

キンコとギンコのマッサージが手足から腰へ変更になった辺りに、不意に外へ繋がる襖の方から物音がした。

その物音にキンコとギンコは即座に反応し、妖気を漏らしながら襖の奥の存在へ威嚇する。

『ひいつ、あ、あの…伝令です』

伝令という単語にクラマはだらけた頭を切り替え、いつものように声をあげた。

「そうか、ご苦労。して伝令とはなんだ？」

『はっ、それが都にある古屋敷に怨霊が出たようで…既に被害が…』

「ふむ…被害はどれ程だ？」

『それが…女性が二人ほど連れ去られております』

「…そうか」

考えられる中でも最悪に近いな、とクラマは思いながら相手の凡その強さを考える。

怨霊というのは妖の類の中では強さがピンキリなのだが、問題はその怨霊がどれほどの『者』なのかという点だ。

基本的に、人は死んだ後は魂が天に昇る。これは呪術師の中では当たり前前の事であり、人々から信頼されている事実だ。

では、怨霊はなぜ生まれるのか？

基本的に怨霊というのは適切に弔われなかった人やこの世へ強い恨みや執着がある者が天に登ろうとせずに彷徨い、怨霊となる場合が多い。

しかも厄介な事に怨霊の強さ⇨執着や恨みの強さな為に、モノによつては九尾や鬼などに代表される高位クラスの強さになったりもするのだ。

なお、怨霊は者によつては少しの対話で成仏したりもするので『万

全な準備をして臨んだら、開始3分で被えてしまった』なんて話は良くある。

しかし、だからと言って舐めてはいけないのが怨霊なのだ。

しかも今回は人を攫っており、しかも女性を攫っている。

怨霊はその強さと意志の強さによっては、女性を捕らえ自分を『産ませる』事によって現世へと戻ろうとする者も居る。

勿論、ただの赤子で戻れる訳もなく、むしろ女性は強い呪詛に当てられて死んでしまう場合が多い。

そして産まれた怨霊は呪子という妖になり、時間が経つにつれてより強大な妖へと進化するようになる。

クラマは今回の怨霊は鬼と同等の強さであると定義付けた。

「一刻も早く向かわないと、場所は？」

『はっ、私が案内します』

「キンコ、キンコ。行くぞ」

「はい、あるじ様」

「了解、あるじ」

襖を開けたクラマは、伝令に先導される形で古屋敷を目指した。



『ククク…クハハハ！ハハ…ゲツホゲホ!?』

古屋敷の奥の部屋にて、その怨霊は笑い声を上げ…そのままむせた。

そんな怨霊を見て、二人の少女はガタガタと震える。

『ククク…しかし哀れよなあ？この私を見た途端、お前達の家族はお前達を置いて逃げ出した…しかし助かったぞ、これで私は現世へ戻れるのだからなあ!』

そう言つて、グワツ！と少女二人へと襲いかかろうとした怨霊は、ピタリと止まる。

『ぬう…この気配と結界…呪術師か！忌々しい…!』

怨霊は苛立ちのままに拳を振り上げ、片方の少女へ振り下ろす。
しかし、バチツ！という音と共に弾かれる。

『ぬう…ぬうううう!!おのれおのれおのれえええ!我が悲願をお!』
苛立ちのままに怨霊は暴れる。

高そうな壺は割れ、襖や障子は吹き飛び、掛け軸は無惨にもビリビ
リに破られる。

そして、障子が吹き飛んだ先に、クラマは居た。

『ぬううう!呪術師は貴様かああ!おのれえ…我が悲願を妨げた貴
様には…死より恐ろしい目に遭わせて…!』

『狐火』煉獄

「妖剣術、地風」

クラマへ飛びかからんとした怨霊は、ギンコに両腕を切り飛ばさ
れ、キンコの煉獄に焼かれた。

『なっ!?ぐわああああ!!?』

なす術もなく、煉獄に包まれてゴロゴロと転げ回る怨霊。

本当ならさぞ強い怨霊だったのだろう。

本当なら、白熱したバトルもあっただろう。

しかし、悲しい事に相手が悪過ぎたのだ。

転げ回る怨霊を、ギンコが蹴り飛ばす。

『ゴハッア!』

「お前のせいで、あるじのマッサージが中断になった。どうしてくれ
る」

『それは逆恨みではないのか!』

「怨霊の分際で喚くな、燃え尽きろ」

反論する怨霊をキンコが煉獄の火力を上げてチリ一つ残さずに燃
やし尽くす。

こうして、怨霊は呆気なく祓われた。

褒めて褒めて、と近寄る二人を撫でながら、クラマは思う

(僕、結界張ったくらいで仕事してないじゃん…)

後の話になるがこの怨霊はそこそこヤバイ方だったらしく、報酬は

怨霊一体に対しては割高になったそうだ。

同僚という存在は有り難くもあるが、時に厄介でもある。

怨霊を倒したその翌日、クラマは日の眩しきで目を覚ます。

「ん…朝か」

目を開けて起きあがろうとすれば、両腕に柔らかな感触を感じたクラマは体の動きを止める。

少しだけ体を起こした状態のまま両側を見れば、キンコとギンコがそれぞれ腕をガツチリと掴み、足もそれぞれ片足に絡ませてホールドしていた。

これでは起きようがない。

「んん…あるじ様…もつとお側に…」

「あるじ…遠い…こつち来る…」

そんな可愛らしい寝言とは裏腹に

ギチリ

クラマの体は人ならざる妖の力をモロに受け、両側から引つ張られる。

「アガツ!？」

少し起き上がっていた体は再び敷布団に戻り、そのまま両側の力によって引つ張られる。

「んんう…遠慮なさらずにもつと来て下さい…」

ギチイ…

「…遠い…もつとこつち…」

ギチイ…

このままでは、クラマの体は裂けてしまう。

クラマは痛みを耐えながら、キンコとギンコのたわわに実ったモノに手を向ける

「さっさと夢から醒めろ、お前らっ!」

むにゆり

そんな音が似合う程、キンコとギンコの突ったそれは大きかった。
「んひゃっ!？」

「ひうっ…」

ビクリと身体を震わせてキンコとギンコは目を覚ます。

頬を朱に染めながら、二人はクラマを見つめる。

「あ、あるじ様…まだ日が高いですよ…こういうのは…夜に…」

「…あるじに求められた…やるっ」

恥じらうキンコとふんす、と気合いを入れて近寄るギンコにクラマは告げた。

「君ら布団に入るの、暫く禁止」

ピシリ…と空気が凍る。

「あるじ様、今なんと言いましたか…?」

キンコは光のない目でクラマを見つめながらそう問いかけ

「……………」

ギンコはキンコと同じように、光のない目で黙ってクラマを見つめる。

そんな二人を見たクラマは眠気が吹き飛び、サツと血の気が引く。

(ま、まずいつ!?!このままではキンコとギンコに叛逆される…!)

光のない目で、キンコとギンコはクラマへ手を伸ばし始めた。

クラマは腰が抜けて立たず、腕はガタガタと震えて後ろへ下がる事も出来ない

そして、二人の手がクラマの服に触れるその刹那。

「クラマあー朝から籠ってるばかりじゃ身体も術も鈍るわよお!」

中の空気などなんのその、襖を勢いよくスパアン!と開け放ちそう言った少女はクラマ達の割とヤバイ光景を見ても

「クラマ、ほら朝のトレーニングよ!さっさと行く!」

そのままクラマの服をむんずと掴み、引きずって部屋を出る。

嵐のように現れ、そのままクラマを有無も言わずに連れ去った事に、キンコとギンコは数秒放心するも、即座に状況を理解する。

「あの女あ…よくもあるじ様を…」

「殺すう…」

殺気と妖気を漏らしながら、キンコとギンコはクラマの臭いを辿って疾走を始めた。



少女に引きずられながら、クラマは廊下から広大な庭を見つめる。

庭では新米の呪術師が先輩呪術師の式神相手に四苦八苦しながら戦闘をこなしていたり、別の場所では小さな子供が先生をしている呪術師から呪術の基礎を習っていたりと賑わっていた。

この光景がクラマにとつて当たり前：という訳でもない。

呪術師というのは基本的には根無し草である。しかし根無草の中でも強い呪術師や家系が元々呪術師であった場合、それぞれの地にある大屋敷という拠点に住む大頭という呪術師達を束ねる長に呼ばれる事になる。

クラマの自室があるのも、そんな各地に点々と存在している大屋敷の一つだ。

しかし、何故大屋敷などという拠点が存在しているのか？

それは呪術師というのが出来てまだ間もない頃に、扱う呪術や使役する式神を悪用する者が現れたからだ。

人々は、そんな者達の対処に悩んでいた。

そんな時、とある呪術師が名乗りを上げた。

その者の名はセイメイ、一介の呪術師でありながら都にとって災厄となる妖から木っ葉の小さな妖怪まで、人が困っているとすれば何処へでも行き人を助けた者だ。

そんなセイメイは悪行を成す呪術師達を快く思っておらず、己の強さのみで悪行を成す呪術師達を殲滅し、そのまま一つの組織を作った。

その名を『天照院』てんしょういん

高い技量を持つ呪術師やその子供を迎え入れ、都や町などに現れた妖や怨霊と言った人に害を成す存在を倒して報酬を得たり、素質ある子供に正しい力の使い方を教育したりする組織だ。

そうして出来上がった天照院は長く続き、今では各地にそれぞれ大屋敷という豪勢な拠点を持つレベルになった。

クラマは家系が呪術師だった為に連れて来られた方だ。

連れて来られた頃には既に式神：キンコとギンコを作った後の為、最初は神童と持て囃されていた。

しかし、蓋を開けてみれば

クラマの強さは中の下、良くて中の上というものであった。

呪術師というのは強さを半ば式神に依存している。

そもそも呪術というのが事前に準備したり、媒体に札や符や杖を使ったりと嵩張る上に一回の戦闘で消耗が酷ければ、別の妖が乱入した場合になす術なく殺される事になる。

つまり

呪術師本人の強さ<式神の強さ

というのがその呪術師を測る強さの目安であり

式神が弱い⇨その呪術師も弱い

という認識になってしまうのだ。

しかし、そんなクラマを鍛えようとする一人の変な同僚が居た。

現在、クラマを引きずっているシユリという名前の少女がその同僚だった。

シユリは式神の中でも最も制御が難しいとされる『鬼』を二体操る凄腕の呪術師であり、ちょうどクラマと同じ頃に大屋敷へと連れて来られていた。

最初は自分と同じように神童と持て囃されるクラマを目の敵にしていたのだが、一緒に仕事をしているうちにその強さを認め、気を許せる同僚や対等なライバルとして接し、気まぐれに鍛えるようになった。

しかし、キンコとギンコが九尾になった途端にクラマは変わってし

まった。

仕事から帰って来れば後は自室へ籠り、食事もキンコかギンコに用意させてダラダラと過ごす。

シユリはそんなクラマを何とかしなければと隙を見てはクラマを攫い、訓練と称してクラマをしごくようになった。

そうした関係が半月も続いているんだよな、と思いつつ引きずられたクラマはシユリの自室へと辿り着く。

「毎回毎回、庭でやり合うのも退屈でしょ？私の部屋でやろう？結界は強固にしてるし、貴方程度の呪術じゃ傷一つ付かないもの」

「いや、その前に首締まりかけてるから離して？」

「あら、ごめんなさいねっ！」

シユリは謝りつつもクラマをポイっと自分の部屋へ投げ込む。

そして自分も部屋へと入れば、ピシヤリと勝手に部屋が閉じた。

…そんな部屋へ、怒れる九尾二匹が迫って来ている事などシユリは一ミリも考えては居なかった。

I F もしもクラマがしごかれなかったら

それは、クラマとシユリが山に潜む鬼の討伐に行った時だった。

「はあ、鬼が潜む山だから雑魚でもまあまあ面倒ねっ！」

そう言っつてグープンで虫の妖怪を粉碎するシユリと、式神の鬼の二人。

そんなシユリの後ろを付いて行くように、クラマとキンコとギンコは歩いていった。

「…あの、自分達も戦えるから少しは頼って欲しいな」

そう言えば、シユリは烈火の如く怒る

「何言っつてんのよ！ 相手は鬼なのよ？ 片方に余力がなきゃ、万が一私達で対処出来ない脅威だった場合に、伝達する人が居なくなるでしょ！」

シユリはそう怒りながらもテキパキと雑魚妖怪達を拳で破壊していた。

雑魚妖怪を蹴散らしながら進んだシユリとクラマ達は、山の開いた場所で一休みを取る。

「ふー…雑魚は蹴散らしてあるけど警戒はしなさいよ。何処から鬼が来るか分からないんだから」

「分かっつてるって…あ、ごめん…厠…」

申し訳なさそうな顔でクラマはシユリに謝る

「…あんまり遠くには行かないでよ、それとアンタは弱いんだから式神もちゃんと連れて行きなさい」

「分かっつてるってば…」

そう言っつてクラマはキンコとギンコを連れて草むらを分けて進み始める。

草むらを抜けた少し開けた所でクラマは用を済ませる。

「キンコもギンコもごめんね」

「いえいえ、私達は貴方の『式神』ですから」

「そう、何処でも一緒、ずっとずっと一緒」

そう言つて笑う二人を見て、クラマも少しだけ微笑んだ。

「おおく？こんな所に人間が居るなんて珍しいな」

クラマはシユリでもない誰かの声に振り返ろうとする。

しかし、振り返ろうとしたクラマの視界はクルクルと回り始めた。

「は…え…？」

クルクルと回る視界の中で、クラマが最後に見たのは

ニヤニヤと笑う鬼と

呆然とクラマを見つめる、キンコとギンコの姿だった。



グチャリ

そんな音と共に、二人の愛する男の首は地面に落ちる。

「ハハハハ！警戒心無さすぎるだろ！この人間よお！」

そして、そんなクラマの首をその鬼は踏み付けた。

硬い物が割れる音と共に弾け、辺りに血が飛び散る。

キンコとギンコは、そんな様をただ茫然と見ていた。

「ああ？お前ら式神になった妖かあ？よかつたなあ！これでお前らは自由の身！好き放題やろうぜえ！」

ゲラゲラと、鬼は二人へ笑いかける。

そして、首を無くしたクラマの身体が地面に倒れた時。

二人はその事実を理解する。

「あ、あ…あるじさま…」

「あ、ある…あるじ…」

絶望して膝をつき、飛び散った血や骨等を服が汚れても構わないと必死に集めようとするキンコと

首を無くした身体を必死に揺らす、ギンコ。

しかし、そんな光景を見た鬼は不思議そうに二人へ問いかける

「お前ら、そんな人間なんて何処にでも居るだろう？代わりなんて人里降りれば幾らでも居るんだ…し…？」

鬼はぞわりと身体を震わせる。

「お前が…お前がああ…」

「ころす…ころす…殺す殺す殺す殺すう…」

ギラギラと金と銀の目が殺意を持って鬼を見つめる。

しかしその鬼は殺意を向けられようと平然と笑う

「なんだなんだ、お前ら、その人間に絆されてたのかあ？クハハハ！

…五尾程度がいきがるんじゃねえよ…」

笑い声を上げたと思えば、ジワリと妖気を漏らし二人を威圧する。

「だが俺にそんな殺気向けるやつなんて160年ぶりだなあ！楽しもうぜえ…殺し合いってのをよお！」

そうして三つの巨大な妖気は衝突した。



「…っ!？」

巨大な妖気を察知したシユリは即座に立ち上がる。

自分の近く…しかもクラマの向かった先に巨大な妖気が三つもあ
る。

「ちっ、アイツ…!」

シユリは草むらを飛び越え、真っ直ぐにクラマの向かった方向へ突
き進む。

(無事でいなさいよ…クラマ…アンタがここで死ぬなんて私が許さな
いんだから…!)

そうして突き進んだ先でシユリが見たのは

「あ…あ” あ” あ” …!」

「ふ” …ふ…ふ…!」

ズタボロになって地に伏せるキンコとギンコに、首のないクラマの
死体。

「まあまあ楽しめたぜえ…五尾にしてはよくやった方だろ」

そんなクラマの死体を踏んづけて笑う鬼の姿だった。

「…ちっ、キンコ！ギンコ！引きなさい！クラマの遺体は私が何とか

回収する！貴方達は大屋敷に戻って…」

増援を呼んで、とは言葉が続かなかった。

ゾクリ、とシュリの身体の芯から恐怖が湧き上がる

「なっ…にが…っ!?」

振り返ったシュリが見たのは

ドロドロと溶け合うキンコとギンコの姿だった。

「な、貴方達…何その姿…!?」

「はああ!?!狐が溶けて混ざるなんて知らねえぞ!?!おい！」

驚くシュリと絶叫する鬼を無視して、キンコとギンコは原型を無くして混ざり合う

そして、黒い一つの球体へと変貌する。

警戒するシュリと鬼は、バキリという音ともに即座に距離を取った。

球体の中からまず出たのは腕だ。

腕はバキバキと球体を壊して行く。

次に出たのは尾だ、金と銀の六対の尾がぶわりと球体から飛び出してくうねうねと悍ましく動く

最後に出たのは女だった。

金と銀がまだらに混ざった髪に、金と銀のオッドアイの瞳がジッと鬼を見つめる。

その身体は、こんな状況にも関わらずシュリと鬼が息を吐く程に美しかった。

そうして、女の目線は鬼ではなく踏み付けられたクラマの死体へと向けられる。

それと共に、鬼の身体は消し飛んだ。

「ガポアッ!?!」

首だけとなった鬼は驚愕の表情を浮かべて宙を舞う

しかし、それも一瞬

鬼の首は即座に爆ぜて、辺りへと血を撒き散らせる。

しかし、クラマの死体には血肉のひとつも付かなかった。

そうして、女はゆっくりとクラマの死体の元へ向かう。

その死体を慈しむように抱き上げた女は、優しく抱きしめる。

「……っ……く……貴方……何者……!？」

恐怖を押し殺して、そう問いかけたシユリを女はチラリと見て答えた。

「私か？ 私はこの方に永遠の忠誠を誓う者だ……ココでは死んでしまったが……世界を超えれば良いだけの事だ……」

そう言っつて、女は腕をあげる。

たったそれだけの動作でシユリは空間が軋むのを感じた。

虚空にヒビが入り、砕け散る。

そうして空いた穴へ女は死体を抱えて歩き出す。

「……ああ、今私が参ります……あるじサマ……」

そう呟くと、穴は閉じた。

「……っ……はあ……!」

緊張の糸が解けたように、シユリは地面に倒れ込む。

「……はあ……はあ……あんな妖怪……知らない……! 伝承で語られた訳でもない、完全に未知の存在……! あんなの………ただの……」

バケモノじゃない……!



暗闇の中を、女は歩く

「ああ……あるじサマ……あるじサマ………貴方が何処へ行こうと、どの時代に居ようと……私が必ず馳せ参じます……ですから……どうか……どうか……出会った時には……」

優しく私を受け入れて下さいね……?」

女は暗闇の中を歩く、しつかりと。まるで行き先は既に決まってい
るんでもいうように

女の歩む先は…誰にも分からない

狭い所で大怪獣バトルをすると被害が甚大

「さあ、いつも通りやるわよ」

そう言つてシユリは構える。

シユリは呪術師でありながら、ゴリゴリのインファイターでもある。

曰く『弱い奴なら殴れば死ぬ』だそうだ。

対してクラマと言えは

「そのいつも通りで毎回怪我するんだけどなあ……こっちは」

符を辺りへばら撒きながら、札を一枚自らの前に投げる。

その札が鈍く発光すれば辺りに散らばった符が集まり、杖の形になる。

これは呪術師にとっては何かあった時の為に使う『緊急用の杖』を作成する呪術であり、本来なら木や土、石などを纏わせて杖を作る。

しかし、クラマは『周りの物を取り込む』点に注目して大量の符を取り込ませる事を思い付いたのだ。

符や札は呪術師の中では最も使われる消耗品である。しかも符は一度きりしか使えないし、札も20回程使えばまた新しく作る必要がある為上位の呪術師は符や札を使うのをやめ、それぞれ自分の動きやすいスタイルの為に独自の呪術を開発する事が多い

クラマはまだそれが出来る技量にない為、戦闘スタイルが『大量の符や札を使つて相手を削り、消耗して来たら呪術で拘束する』というものだ。

このスタイルはとても効率が悪い。

何せ、一回の戦闘での消耗が激し過ぎるからだ。

しかしクラマは札や符をコツコツ作る事に抵抗がなく、仕事が終われば消耗した符や札をチマチマと作っていた。

キンコとギンコが九尾になってからは、二人が片手間に量産するようになった為にやる事がなくなってしまったが

クラマはそんなお手製の杖を構える。

「やる気満々って事ね…いいわよ、今日もしごいて倒してあげるっ！」
即座にクラマとの距離を一瞬で詰めたシユリはクラマの腹へ掌底を叩き込む

反応出来ずに吹き飛んだクラマは襖へと激突する。

しかし、クラマが激突したにも関わらず、襖はびくともしなかった。

「ほら、アンタ防御姿勢は取ってたでしょ。さあ立つ！」

クラマは痛いなあ、と思いながら立ち上がる。

「シユリの初手の攻撃、何回やっても回避が出来ないんだけど…」

「当たり前よ、この最初の一撃で弱い妖怪なら木っ端微塵だもの。でもそれを耐えられるようになってるのはアンタが成長して来てる証拠よね」

「シユリ基準の弱い妖怪って大体中級じゃ…」

「はい、無駄口叩かない。次行くわよ」

そうして構え直すシユリを見て、クラマは苦笑いしながら立ち上がる。

「せめて一撃入れたいな…」

「アンタが一撃入れられたら快拳モノよ、まあそうねえ…一撃入れられたら、私がお願い一つ聞いてあげる」

「……………」

その言葉に本当かよ、とジト目を向けるクラマ。

クラマは知っている、シユリは気に入らなければその強さで拒否する人物な事を

「何よその目!? 私がせっかく特大のご褒美あげてるんだからやる気出しなさいよ！」

そんなクラマを見てうがー！と怒るシユリを見て、クラマは笑みをこぼす。

幾ら呪術師の中で他を圧倒する強さを持つのが、シユリも年相応の女の子なのだ

「今私の事笑ったわね？笑うだけ余裕があるなら、もう少し激しくしてやろうかしら…」

その笑顔が気に入らなかったのか、シユリは威圧感を増してクラマ

を見つめる。

それと同時にクラマは悟った。

これ、何も出来ずにやられるやつだ…と



キンコとギンコはクラマの匂いを辿って、シユリの自室へ辿り着く。

無言で襖に手をかけ無理やりこじ開ける。

「おお、主の言っていた通り来たな」

「妖気と殺気が漏れてるなあ…そんなにお前らは離れたくないのか？」

襖を開けた先には、二匹の鬼が居た。

その鬼は変わっていた。

片方はボサボサの髪をそのままに、着物を着崩して座り込み酒を飲み干す女の鬼

片方は髪を綺麗に纏めてポニーテールにし、着物をしっかりと着るボーイツシユな雰囲気の女の鬼。

彼女らがシユリの操る鬼、名を『シユラ』と『モミジ』と言う。キンコやギンコと同じ高位である鬼の妖だ。

「邪魔をするな…!」

「そこ、退け…!」

ゾワゾワと、並の呪術師や妖怪が浴びれば即座に気絶する程の妖気を漏らしたまま、キンコとギンコは睨む。

しかしそんな妖気を浴びても、二匹の鬼は笑うのみ。

「ははは! 相変わらず凄まじい妖気よなあ!」

「余り煽るな、シユラ。本気でやられたら結界が壊れるかもしれないんだぞ」

笑いながら酒を飲むシユラと、そんなシユラを宥めるモミジ。

「退く気はないという事ですね」

キンコの問いかけに、モミジは笑う。

「あいにくな、主はお前達の主を強くしようと躍起になっている。あんなに生き生きしている主を見るのは私達でも初めてでな。出来れば前のような邪魔はやめて貰いたい」

「あるじ様を鍛える必要はありません、私達が守り続けますし、強くなりたいなら私達で教えます」

「あるじは私達が守る、ずっとずっと守る……あるじが強くなる必要はない」

「そうやって甘やかしてたら、いつかお前らの主はいつか呆気なく死ぬ事になる。主も私達もそれは望んでいない」

話し合いでの解決は無理だとしても言うようにキンコとギンコは妖気をより強める

「あるじ様の事を知らない癖にほざくな、鬼が」

「あるじは私達が弱い頃から守ってくれた、だからこれから先は全部私達が守る……！」

そう言つて構える二人に、モミジは苦笑して拳を構えた。

「やれやれ……とんだ過保護が居たものだな」

「そりゃあ、俺らが式神に成りたてな頃からべつたりだったんだからこうなるだろ」

酒を飲むのをやめて、シユラは立ち上がった。

「ま、妖怪がいがみ合いすればやる事は一つだろ。さっさとやろうぜ」

そう言つてポイツと酒甕を投げたシユラを合図に

四つの強大な妖気が衝突した。



その妖気は、訓練をするシユリとクラマでも感じる事が出来た。

「シユリ、いいのか？」

「全然平気…って訳でもないのよね」

チラリとシユリは戦いの余波で揺れる襖を見る。

襖越しでも分かる程の轟音が、化け物じみた妖怪達の戦いの凄まじさを二人へと伝える。

「…そろそろ止めた方がいいか?」

「…そうね、ちよつと私の結界が軋んで来てるし…止めに行きましようか」

シユリは溜息を吐きながら、襖へ手をかけようと近寄る。

しかし、何かに気付くとクラマへ飛びかかつて、そのまま襖から離れる。

それと同時に襖を突き破ってもみくちやになった四人が飛んできた。

「んの、やろう! 噛みつくなコラあ!」

「ガルルルツ!」

「おいおい片方野生に帰っちまってるぞ」

「キンコ、昂ったら野生に帰る。仕方ない事」

「お前は冷静な事を言いながら刀で首飛ばそうとして来るなっ!」

腕に噛み付くキンコと、そのキンコの尻尾に拘束されるシユラ

首を執拗に狙って刀を振るうキンコと、必死に弾くモミジ

そして、そんな光景をポカンと見るクラマと

襖の奥の惨状を見て頭を抱えるシユリ

この場合は、混沌と化していた。

「あ、あるじ」

「はっ?! あるじさま!」

しかし、キンコとギンコがクラマに気付くと鬼二人を踏み越えて飛びつく

「ぐはっ!」

「あるじ、あるじあるじあるじあるじ…」

「ふー…やっぱりあるじ様の下が落ち着きます」

二人してその身体を遠慮なく押し付けて抱きしめる光景を見て、鬼二人は苦笑する。

「さつきまでこの世の終わりかってくらいに激しい戦いしてた奴らか、これが」

「全くだな…あれ、酒は何処だ？」

「んなもん割れたぞ」

「…嘘だろお…！」

苦笑しながら二人にもみくちやにされるクラマを見つめるモミジと、酒がない事に絶望して静かに泣くシユラ

しかし、二人はそんな事をしている場合ではなかった。

「貴方達、あの部屋の惨事の弁明を聞きたいんだけど？」

二人はサツと正座する。

「本当に申し訳ない主、久々に熱い戦いだから昂ってしまつてな」

「何せあの二人がまた強くなつてなあ！」

「言い訳無用」

「はい、すいませんでした」

二人は綺麗な土下座をした。

キンコとギンコの二人にもみくちやにされたクラマは、二人に抱えられて自室へと戻って行く。

部屋をボロボロにしたシユラとモミジは、朝から部屋の修繕の為に妖術を使うのであった。

皮肉の地の獣

これは、とある土地の話だ。

その土地は何年経とうと、果物のなる木々が生え、大地は青々と草を生やし、その土地に生きるものに活力を与える。

そして、そんな豊かな土地は当然ながら権力者や妖怪に狙われる。

しかしその土地に踏み入った者は誰一人帰って来なかつた。

それはその土地の奥の奥、朽ち果てた家の側に眠る。一匹の獣が原因だった。

その獣はスヤスヤと眠っている。

しかし、土地に何者かが足を踏み入れた。

獣は即座に目覚め、唸り声を漏らしながらゆっくりを起き上がり、その侵入者の元へ歩き始める。



「つたく、こんな豊かな土地を手に入れるってだけなのになんで俺達が雇われなきやならねえんだ」

「入った奴らが誰一人帰って来てないんだ、妖怪の仕業だってお偉いさんも考えるだろ？それに報酬も結構割高だったしよ、ちやちやつと終わらせて報酬貰ってパーっとやろうぜえ？」

「それもそうだなあ、パパッと終わらせるとすつか」

土地に足を踏み入れた、二人の呪術師はそんな事を言いながらも周りを警戒する。

「しかし、豊かな土地だよなあ…木々が雑に生えてんのがいただけねえが、果物とか生えてるしな」

そう言って呪術師の片割れが木になった果物を取ろうと手を伸ばす。

しかし、その腕は次の瞬間に消えてしまった。

「なっ!?!お、俺の腕がああ!?!」

肘から先がなくなった腕を抑えて、男は叫ぶ
もう片方は周りを警戒して札を構える。

「ちつ、カマイタチか何かか？」

その時、茂みがガサガサと音を立てる

二人は警戒して、その場を飛び退く

そこに居たのは獣だった。

白く巨大な一匹の獣だった。

その獣は怒りの籠った目を二人へ向ける。

「ちつ、やるぞ！コイツが主だ！殺せば解決だ！」

「俺の腕を奪った罪、その体で味わえや！」



「げほっ…あ…」

「な、なんだこの獣あ…」

二人の呪術師は四肢を噛み砕かれ、胸を引き裂かれ、息も絶え絶え
だった。

そしてそんな呪術師を見る獣は

前足が引きちぎれ、所々に火傷を負っている。

しかし獣の先から黒いモヤが現れ、ちぎれた前足に引っ付くとズル
ズルと戻って引っ付く。

そのままモヤが収まれば、ちぎれた前足は元通りだというように獣
は前足で大地を踏む。

火傷も黒いモヤに包まれれば元通り

「ば、化け物だ…こんな勝てる訳ねえだろ…！」

「く、くそっ！最初から分かっていたらこんな依頼受けてなかったのに

！」

金に目が眩んだ二人の呪術師か最後に見たのは大口を開けて二人を喰らおうとする、獣の口の中だった。



ゴリゴリと、『侵入者』を喰らいながら、獣は思い出す。

獣はいつも思い出す、大切な主人の言葉を

『??、私はこの家を離れなくてはならない。私の家族と家の事を頼んだぞ』

獣はいつも思い出す、無力な自分が家族を守れなかった。あの時の事を

『ああ、???は無事だったのね…ごめんなさい貴方…家と子供を守れなくて…』

そして獣は再び決意する。

この土地はご主人と、家族の土地だ。

誰にも、誰であっても、踏み荒らさせはしない。

とうの昔に獣は妖になっていた。

主人の家族を盗賊に殺されたあの日に、獣は一匹で盗賊共を殺し尽

くした。

そうして、恨みや憎しみが獣を妖へと変えた。

『侵入者』を喰らい終えた獣は、朽ち果てた家へ戻る。

そこが守るべき場所なのだ、主人の帰る場所なのだ

獣は今日も、土地と朽ちた家を守り続けている。

来るはずのない、主人の帰りを待ちながら

お気に入り100件記念小話 とある日のキンコと
ギンコ

その日の朝、クラマはやけに甘ったるい香りが鼻をくすぐるので早めに起きる。

何処から匂うのか、とクラマはキョロキョロと辺りを見渡す。

匂いを辿れば、自分の寝室の奥…キンコとギンコの部屋からやけに匂う。

何をしているのだろう、と部屋へ繋がる扉へ手をかけるもバチリッ

そんな音と共に弾かれる。

クラマは呪術師だが、技量的には二人の方が上だったりする。故に二人がかけた結界を解く事が出来ないのだ。

しかし、結界を張るという事は何か大切な事をしているのだろうとクラマは出てくるまで時間を潰す事にした。

「そうだ、前に知り合いの呪術師から貰った本を読もう」

思い立ったら即行動、クラマは保管してある収納棚から本を探す。

しかし、本はそこにはなかった。

一体あの本は何処だろう？とクラマはしばらくの間探し回る事になった

しかし、幾ら探し回ろうと見つかる事はない…何故なら



「全く、あるじ様にこんなモノを渡すなど…あるじ様が穢れてしまいます」

そうやってキンコは棚にしまってあった本をチリ一つ残さずに燃

やす。

「あるじ様が『そういう事』を知るのはまだまだまだ先でいいのです…」

「同感、あるじの『初めて』は私達でいい」

ギンコはそう言いながら、ドロドロした物体を見つめる。

「商人が言つてた、外の国の甘い菓子…溶かして固めて好きなように形を作れるというけど…：茶色一色じゃつまらない」

「そうね…：せめて色々な色が使えれば…あるじ様に擬似的に私たちを食べて頂けるというのに…」

「ちよつと昂る…」

ドロドロした物体は溶けたチョコレートだ。

なぜ、キンコとギンコがチョコレート所持しているのか

それは商人から買ったからだ。

なぜ買ったのかと言うと、クラマから小遣いとして渡されているお金（並の呪術師からするととんでもない大金）で買ったのだ。

因みにキンコとギンコは、クラマにお金の管理も任されている。本人曰く『自分じゃ使い道が分からないから、二人に任せる』と言われており、そのお金で食事から何まで全て出している。

キンコとギンコがなぜチョコレートを買ったのか？

それはクラマに甘味というのを味わって欲しかったのだ。

二人は前々から食事に果物や和菓子と言った甘味を用意していたのだが、クラマ自身が遠慮するので廃棄するのも勿体無いと二人で食べていた。

何故食べないのかと考えた二人は、果物や和菓子がクラマからすれば『高価なもの』でありそんなお高いモノは自分で食べるより二人に食べて欲しいから遠慮しているのだと結論付けた。

そもそもクラマの家系は呪術師なのだが、お世辞にも裕福とは呼べず2人が式神として捕まえられる前から貧しい生活を送っていたのだ。

そんなクラマが食べていたのは山へ行って自力で取った山菜に川魚程度で、殆どを家族やキンコとギンコに与えて自分は少しの山菜と小さな川魚を食べるのみだった。

二人はそんな食生活をしているクラマを見ているので、こうしてお金が潤沢にある以上は色々な物を食べて欲しいと食事にあれこれ工夫をして食べさせていた。

しかし毎回食事をしては『家族にも食べさせたい』というので稼いだお金の10%+同じ食事をクラマの実家へ送っていたりもする。

「しかし、冷やしてしまえばこの通りカチカチと…」

キンコはギンコが試しに冷やしたチョコレートを指でツンツンとつつく

「でも熱を与えて溶かせば、元のドロドロになる。不思議」

「つまり、幾らでも失敗が効くということですね…」

ふむ、と考えながらキンコはチョコレートを狐火で溶かす。

「しかし、どうやったら食べてくれるでしょうか…」

「…あるじ、食べ物みたいな形じゃないと口に入れない気がする」

「それはそうですが…かと言って食べ物と似せて作ってしまうと逆に遠慮してしまうかもしれませんね…」

キンコとギンコは二人して悩む。

そしてふと、ギンコが思いつく

「はっ、丸薬みたいに丸くして、食べさせるとか？」

「外の国の薬、という事にすれば…確かに」

そうと決まってしまうえば作るまで時間がかからなかった。

ものの数分で小粒サイズのチョコレートの出来上がる。

「しかし、冷やしてしまえばあの硬さ…あるじ様が噛みきれないと困りますね」

「丸薬で渡す訳だから…ガリつといけないと不審に思われる」

二人は試しに作ったチョコレートをひよいと口に入れて噛み砕く。

「ちよつと硬い」

「…私達では噛み砕けてもあるじ様には…少々難しいかもしれませんね」

どうしたら食べやすくなるのか?と二人は色々な試作をしていく

そうして試作をしていくうちに、チョコレートも少しになってしまった。

「……少し食べ過ぎました……うう……」

「…チョコレートも少しになっちゃった、でもこの量なら三粒は作れる……」

キンコはお腹を抑えてうめき、ギンコは妖術で『工夫』をしてチョコレートを三粒作る。

「後はこれを食べさせるだけ、頑張る」

「ふー…落ち着きました…想定よりだいぶ消費してしまいましたが、これなら問題ありませんね」

「うん、はやく食べさせよう」

そうして二人は結界を解いた。



ボケーつと天井を見ていたクラマは扉の開く音を聞いて起き上がる。

「あるじ、これ」

「実はあるじ様に試して頂きたいモノがありました…それを自室で作っていました」

そう言ってギンコが盆に乗った三粒のチョコレートをクラマへ見せる。

「外の国と繋がる商人から買った物で作った丸薬、あるじに試して欲しい」

「いいの？外の国のモノなんて高かっただろう？」

「問題ありません、それにこれならあるじ様も丸薬が使い易くなるかと」

「なら、せっかくだし貰おうかな」

そう言ってクラマは三粒のチョコレートを一気に口の中へ放り込み、咀嚼する。

「ん、甘い…？」

「外の国のお菓子で丸薬を包んだ、これならあるじも飲みやすい」
「確かに、ありがとう二人とも」

そう言つてニッコリと2人へ笑いかけたクラマは
「うん…？なんかクラクラす…」

パタリと倒れ込んだ。

「ん…計画通り」

「…後は私達の部屋に運び込むのみですね」

実はチョコレートでコーティングされた丸薬は睡眠作用のあるものだったのだ。

眠ったクラマを運びながら、二人は舌なめずりをする。

そうして自室へと運び込まれると、扉はひとりでに閉まる。

それと同時に強力な結界が貼られた。

…余談だが、コトに進む前に『なんか嫌な予感がしたわ！』とやってきたシユリによって、キンコとギンコの思惑は未遂に終わった。

クラマは妖怪タラシ？

その日、クラマとキンコとギンコは山の中で結構面倒な妖怪相手に苦戦を強いられていた。

「なんか久々に符を大量消費してる気がするっ！」

「あー！燃やしても燃やしてもそこから辺から湧いて来ます！」

「凍らせてもダメ、斬ってもダメ、面倒」

『キュー、キュツキュツキュツ！我らキュウソは1匹見たら30匹は控えている。言わば数の暴力！幾ら強力な式神や呪術師とは言え数の暴力の前では無力！ジワジワ貴様らを弱らせて女はポイ！男はタネとして使つてやるううう！』

ぷっん

そんな何かが切れた音と共に、キンコとギンコの妖気が溢れ出す

「この全てを燃やしてお前を消す」

「何もかも斬り刻めばもう増えないよね？」

『キュツ!』

膨大な妖気を使い、キンコは燃え盛る巨大な火球を作り、ギンコはクラマとキンコ以外の全てを斬り刻もうと構える。

クラマはそんな二人を苦笑いで見ながら、周りを見て巻き込まれそうな人は居ないかと探す。

「あわわわわ…」

ちょうどクラマの背後でガタガタ震えている少女をみかける。

クラマは危ないと、少女を抱えて山を走る。

「ひゃっ!？」

「キンコ！ギンコ！僕は避難してない一般人抱えて山を離れるから、出来るだけ山に被害を出さないようにお願いね！」

「ご安心ください、あるじ様。あるじ様をタネと呼んだ畜生は私がチリも残さずに消します」

「別に山を消しても地脈を使えば元通り、問題なし」

『お前ら怖過ぎるってb…』

クラマが山を離れると同時に、山の全てが斬り刻まれ火炎が山を包み

『ギエアアア!!』

窮鼠の絶叫が響いた。

そんなこの世の終わりみたいな光景を少女を抱えたままクラマは見る。

クラマに抱えられた少女は、そんな光景を見てクラマに引っ付き震えていた。

そんな少女をゆっくり降ろして、クラマは少女を撫でる。

「僕が居たからよかったけど、山は昔から妖の棲家だ。不用意に入ると妖に襲われるから次から気をつけるんだよ?」

「…ふあい…」

ぼんやりとクラマを見つめる少女を見て大丈夫かなと思いつつクラマは燃え尽きた山を見る。

二人と山を再生させないとなくクラマは少女に家に帰る事を促して走り出す。

そんなクラマを、少女はただジッと見つめていた。



「あの呪術師さん、私が妖怪って気付かなかったんだ…最初が良い獲物って思ったけど…ただ喰らうだけは惜しいなあ…身も心も貪り尽くしたくなっちゃった…」

じゅるりと口から溢れる涎を拭きながら、少女はクラマに触れた手の匂いを嗅ぐ。

「…匂いは覚えた…九尾が二体も居るなんて驚きだけど、徐々に強くなるのは狐妖怪だけの特権じゃない…」

ぶわりと少女の妖気が溢れる。

妖気が収まれば、少女にちよこんと生えた狼の耳と尻尾。

「…私は犬神、恨みと想いで強くなる…：待っててねえ、呪術師さん。いつか九尾どもを蹴散らして…呪術師さんを貪り喰らってあげるから…」

そう言っただけで犬神の顔は恍惚していた。

「そうと決まれば…強くならないとなあ…：ふふふ…」

犬神はその場を離れて強くなる為に走り出す。

その顔は新しい獲物を見つけた嬉しさと女として惚れた喜びで口が裂けそうなほどに笑っていた。

この日以降、雑魚妖怪の数が劇的に減った。

しかし、雑魚妖怪というのはポコポコ湧くので熟練の呪術師達はそれを『腹が減った妖怪が喰らったんだろう』と勝手に決め付けて放置した。

セイメイとドーマンは自身と式神を総動員して大量の書類を捌いていたので、異変に気付けなかった。

犬神は徐々に強くなる。

その強さの底は、誰も知らない。

お気に入り200件突破記念　もしもク라마が強かったら

その呪術師は強かった。

妖怪が現れたと聞けば、即座に大屋敷を飛び出して退治に向かい
日没前には帰って来る。

その呪術師はマツスルだった。

着込んでいる狩衣がはち切れそうな程にミツチミチに筋肉があつた。

その呪術師の名はク라마

パワーと呪術によって、大体の事を解決してしまう。

セイメイとはまた違った方面でぶっ飛んでいる呪術師だった。



「くっ、なんて数の妖…私一人では捌ききれない…!」

大量の妖を前に、その呪術師はジリ貧になっていた。

「しかし私も呪術師の端くれ、たとえ殲滅出来なかったとしても…ここは通さないっ!」

「その意気込み、呪術師として素晴らしい!僕も加勢しよう!」

「えっ?」

そんな呪術師の頭上から、何かが降って来た。

それは、筋肉だった。

とても頼れる、背中だった。

「今までよく耐えたね、ここから先は僕が助けよう」

「あ、あなたは…ク라마様!」

「うん、その通りだよ」

そうやって喋るク라마の元へ妖が飛びかかる。

「クラマ様！妖が！」

その首に食らいつかんと飛びかかった妖は

「ん？邪魔だなあ」

ぺちんっ

そんな、蚊を叩くような音と共に地面にめり込んで絶命した。

「えっ？」

『えっ…？』

その光景に、呪術師も他の妖も動きが止まる。

「妖怪は空気読まなかつたりするもんね、仕方ない」

よっこらしよ、とクラマは拳を構えた。

「それじゃあ行くよ、気合いっ…一撃い！」

ブオン！と風邪を切る音が響くと共に

『ぐわあああああ！』

妖怪達は宙を舞い

『ガバアッ！』

そのまま地面に埋まった。

「こんなにかかってくれて助かるなあ…滅っ！」

クラマが符を一枚使って呪術を唱える。

たったそれだけで大量に居たはずの妖達は

『ギエアアアア！！』

断末魔の叫び声をあげて、全て消え去った。

「あ、ありがとうございますございますクラマ様…っ…！」

感謝を述べた呪術師は、ズキリと痛む足を庇う。

「ん？怪我してるのかい？」

「い、いえ…お気になさらず！私の事は良いので他の人の元へお願い

します！」

「怪我はどんなものであれ見過ごせないな、よし」

そう言ってクラマは呪術師を抱える

「えっ？」

「全力疾走で大屋敷へ戻ろう、君の怪我が心配だ」

「いえいえ！私の事は良いので…！」

ふるふると首を振って遠慮する呪術師にクラマは告げる。

「大丈夫さー！ここからなら15分もあれば辿り着ける！」

そう言つてクラマは走り出した

「あああああ…!!」

そしてクラマに運ばれる呪術師の声が、その場にこだましたという。



所変わって、大社。セイメイとドーマンが住み、書類と毎日格闘し、ついでに脱走をするセイメイをドーマンが捕まえる事が日常な場所。

そこで今日も捕まったセイメイは不満な顔をしながら書類を書いていた。

「もう1000年も書いてきたから飽きてきたんだけど」

「貴様が作った組織だろう、責任くらいは背負え」

「後任が見つからないんですー！私だってねえ！本当は150年くらいしたら後任も出来るだろうと計画してたのに！いつまで経っても私と同じ技量の呪術師が生まれないうやないかああー！」

筆を投げ捨てて…床に寝っ転がり疲れたんだ休みたいと駄々を捏ねるセイメイとそれを見てまたかと呆れるセイメイの式神達。

「しかし、クラマと言ったか？最近の若い者だが…技量、性格も申し分なし。お前の後任にぴったりだと思うが？」

ドーマンはそんな提案をセイメイにする。

その言葉を聞き、駄々を捏ねていたセイメイはすつと真面目な顔になり、ドーマンを見上げながら答えた。

「あの子はダメだ、あの子を後任には出来ない」

「何故だ？技量は私達に近く、性格も粗暴というわけでもあるまい」

「違うんだよ、ドーマン。私が言ってるのは強さとかそういう問題じゃない」

そう言っただけで立ち上がったセイメイはまっすぐとドーマンを見つめて言った。

「あの子は妖にとって極上の獲物なんだ、良くも悪くもね」

その言葉にドーマンは理解する

「…妖の成長を促すと言いたい訳だな」

「そうだね、今のあの子は余りにも大っぴらに活動し過ぎている。このまま行けば、封じられた妖も目覚めてしまうだろうしね」

「封印されていようと、感知してしまうという訳か…面倒な」

苦虫を噛み潰した顔でドーマンは思い返す。

ドーマンとセイメイが表立って活躍していた頃、まだ妖達は今よりも遥かに強かった。

何故なら、妖を率いる『強大な妖』がそこらじゅうにいて、更にそれを率いる『主』がいたからだ。

妖というのは肉体に縛られていない、精神がその妖の強さに直結する。

たとえ肉体が減びたとしても、その妖に『次を望む意思』があれば時を経てまた蘇る。

そして、強大な力を持つ妖というのはその場に居るだけで、他の妖の精神を安定化させ更に強くさせてしまう。

こうして、呪術師が職として機能し新米や中堅がある程度生き残っているのも、セイメイとドーマンが活動していた頃に『間引き』をしていたからだ。

しかし、何故セイメイやドーマンほどの呪術師がそんな存在するだけでヤバい妖達を滅する事をせずに封印したのか？

それは滅してしまえば長い年月を経て復活してしまうからだ。多少の弱体化はするが、元々が強い存在な為に太刀打ち出来る呪術師はセイメイとドーマンが知っている限りでも片手ほどになってしまう。

そんな奴らが封印されているとはいえ、『極上の獲物』を知ってしまったら無理矢理にでも封印を自力で解き始めるだろう。

「だから私はあの子を後任には出来ない、あの子には一生『そこそこ強い呪術師』に留まってもらう必要がある」

「しかし、仮にクラマが各地で暴れ回り封印された妖怪達が復活したとしても問題はあまるまい？」

そう言つて笑うドーマンにセイメイも笑いかける

「当たり前だろう？私と君で勝てない存在なんて、この世界には居ない…正確に言えば『まだ来ていない』が正しいね」

「ココと異なる世界でも夢に見たか？セイメイ」

ドーマンの指摘に、セイメイは苦笑いする。

「あいにくね、夢に見てしまったよ…やれやれ『百鬼夜行の主』が蘇るなんて夢見が悪過ぎる」

放り捨てた筆を持ち直して、セイメイは呟いた。

「強さには責任と…宿命がついて回るものだ。…君は私達と同じ『世界を見つめる者』になるか、はたまた…私達の知らない道へ行くか…見させてもらおうかな…クラマ」

そう言つてセイメイは空を見つめた。

「空を見てないで書類を終わらせろ、セイメイ」

その一言で空気は軟化する。

「やだあああ！もう武神に任せて休むんだあああ！」

「あー、分かった分かった。酒を飲みに行こう、だからこの場でそんな物騒な札を出すな」

半泣きのまま、セイメイはドス黒い札を懐から取り出していた。

しかしその話を聞けばサツと仕舞い

「流石ドーマン！分かつてるじゃないか！」

キラキラとドーマンを眩しい笑顔で見つめる。

「ならお代をそろそろ半々ではなく全額そちらが持つて貰いたいものだな」

そんな笑顔を見て嫌そうな顔のまま、ドーマンは言い返す

「君と私の仲だから良いだろうー」

「何も良くないわ!!」

ギャアギャアと言ひ合ひをしながら、セイメイとドーマンは行きつ

けの居酒屋へ向けて歩いて行く。

そんな二人をセイメイとドーマンの式神達は見送りながら、ため息を吐く

(この書類、二月も先の物なんだけどなあ)

式神達はせつせと書類を仕舞い始めた。

少年と猫と主

「けほっ、けほっ」

少年は布団に包まりながら、咳き込む。

「にやあ…」

「にやあう…」

そんな少年を心配して、二匹の猫はすりすりと身体を擦り付ける。

「タマ、マロ…大丈夫…僕も、毎日お薬、飲んでるから…けほっ…けほっ…頑張れば治るはずなんだ…お父さんもお母さんも…薬の為に仕事をいっぱいしてるから…僕が頑張って治さないと…」

少年の家族にとって、薬は高価なものだった。

しかし両親は何とか治したいと仕事をかけ持ちし高価な薬を買い漁って少年に与えていた。

あれ程までに笑顔だった両親は、今では笑わなくなった。

ただ少年が咳き込むだけで心配し、少年は毛布で包まれ食事も元気になれるものを与えられる。

心配してくれる両親を嬉しく思うも、少年は両親をこんな風にした自分の病が許せなかった。

一刻も早く、一刻も早く、この病を癒してまた家族と笑い合いたい。

少年はただそれだけを願って、毎日食事と水、薬を飲んでただジツと治るのを待っていた。

そんな少年を見てきた、タマとマロはどうしようと考ええる

『ご主人の弱りが治らない』

『くすりというのがダメかもしれない、何か他にないのか？』

二匹は少年の側を離れ、町を歩きながら考える。

「ふむふむ、私が知らない間に人の世とは変わったみたいだな…だが…病は未だにそのままか…私が知る薬草があれば、殆どの病は治ると言うのに…彼奴ら、まさか教えてやった事を忘れたのか…？」

ボロボロの外套で全身を包み込んだ者の独り言に、タマとマロは反応する。

二匹は急いで、その声の主の元へと向かう。

『そのやくそー、教えてくれ!』

『それでご主人が治るのか!』

にやあにやあと自分の足元で鳴く猫を、その者はしゃがんで見つめる。

「どうしたお前達? 何? 飼い主が弱っていて薬が効かぬ? それで薬草のある場所を教えて欲しい…と…ふむ…」

その者はそのまま空を見つめて考える

「…ここで使つて良いモノか…まあアイツらとまた会えるかもしれんしな…」

何かしらを決めたその者は、二匹の猫に告げる

「その薬草は険しい所にあつてな、今のお前達ではそこへ向かつても無駄死にをするだけだ。だから私が力を与える、だが私でさえもお前達がどうなるのかは分からない…それでも良いか?」

『構わない!ご主人の為なら!』

『弱っているご主人の助けになるなら何でもいい!』

「…そうか。お前達は優しく、とても良い奴らだ…良い存在になれるといいな…」

その者の声音はどこか懐かしむような声だった。

そうしてぼんやりと紫の光を二匹へと当てる。

メキメキと何かが成長する音と共に、二匹の姿は変わった。

尾は二つに分かれ、身体は成長し二回り程大きくなった。

「うむうむ、成長したな。お前達」

そう言つてその者は笑う。

『これでやくそーを取りに行けるんだね!』

『早く、案内して!』

「急かすな急かすな、どれ…私と一緒に行くこうじゃないか。私も久々でね、正直どうなってるか分からないから気を付けて行こう」

そう言うと、その者と二匹はその場から消え去った。



険しい山の麓に、一人と二匹は転移した。

『すごい！すごい！こんなのを使えるのか！』

『お前、もしかして凄いやつなのか？』

「いやいや、私はこれでも千分の一の強さになっていてね。こういう事は全然出来るけど、戦いとなれば多分…君達を頼る必要があるかもねえ…」

さあ行こうか、この山の山頂にその薬草はあるはずだからさ」

そう言つて、その者は二匹を先導するように歩き出した。

険しい道のりを二匹は軽快に登る。

しかし先導するその者は、息切れ気味だった。

「はあ…あれ…？おかしい…なあ…私はこの程度でへばつてしまう…体力では…ない…はず…」

そのままへたり込んだその者を二匹は心配する

『お前、大丈夫なのか？』

『無理したらダメだぞ？』

「君らに心配されちゃうと、旧友達に笑われてしまうなあ…よつこらしよ…ふう…行こうか…もうそろそろ着くはずだ」

ふらふらしながら立ち上がったその者を心配するようにタマとマロは寄り添った。

そうして、ふらふらしながら山頂へと辿り着く。

「あー…やつとたどり着い…は？」

『ここ、やくそーがあるのか？』

『変な建物しかないぞ』

山頂にあつたのは、草原でもなく、ゴツゴツした岩肌でもない。ただ巨大な大社がそこに鎮座していた。

「あつははは…まさか敵陣の本丸にそのまま乗り込むとか幾ら私でも…」

ダラダラと汗をかき始めたその者をタマとマロは心配そうに見つ

めた。

「ふん、こちらでも貴様の顔を見るとは思わなかったぞ」

いつから居たのか、大社のすぐ横に人が立っていた。

その者は真つ黒な狩衣に身を包み、鋭い目線を送りながら札を構える。

「や、やあやあ久しぶりだね？ドウマン」

「その名で呼ばれるのも千年ぶりだな、『百鬼夜行の主』よ。ノコノコとこの場にやってきたのだ、一先ずは目的を聞こう」

そう言いながら放たれるずっしりとのしかかる圧にタマとマロは堪らず地面にへたり込む。

『な、なんだこれ…身体が動かない…！』

『た、立てないよ…！』

そんな二匹を見たその者…主はドウマンに告げる

「やめてくれドウマン、この子達は僕の仲間じゃない」

「ふん、襲わんと誓えるなら解いてやる」

「襲えるわけないだろう!?君ほどの呪術師に襲いかかれるやつなんて封じられたあの子達くらいだよ!」

「それもそうだな、その二匹はどう成長しようとしてそこそこ強い妖にしかねれん」

ふっ、と圧を解いたドーマンはただジツと主を見つめる。

「貴様を倒し、その魂魄をバラバラにしたと言うのに…逃したたった一片から蘇ったか、しぶとい奴め」

「ふふ、しぶとさは僕のウリさ!…でも今の君とやり合えば確実に消されるから無理だね」

「だろうな、貴様も今は何もしていない。昔の旧友として許してやる」
「それは有難い、それはそうと目的について何だけどね」

「ああ、聞いてやる」

不満な顔のまま、ドーマンは主を睨み付ける。

「この子達のご主人つてのがね、病にかかっているからさ。ここに生えてた薬草を分けて欲しいんだ」

「…そんな事の為に前は力の一端を与えたのか?…信じられん

…」

ドーマンは少々驚いた顔のまま、へたり込んだままのタマとマロを見る。

「そうだろう？ 僕も丸くなったのさ！」

「だがあの薬草を管理しているのは私ではない」

「……ああ、居るんだ。セイメイ」

「居るが、今は書類の山と格闘中だ。早々には出て来れ……」

「呼んだあ？」

大社の扉を開けて、ひよつこりとセイメイは現れた。

「……………」

「……貴様……」

「……………」

「……………」

ひよつこりと現れたセイメイに頭を抱えるドーマンと、そんなセイメイを見て口をあんぐりと開ける主、そして何も分かってないタマとマロ。

「全く、いきなり飛び出してびっくりしたよドーマン……それでお客さんは……………へえ？」

ドーマンを超える圧が、一人と二匹にのしかかる。

「何をしに来たのかな？ 『百鬼夜行の主』」

「き、君は……相変わらずデタラメな強さだな……！」

ガクガクと足を震わせながらも主は真っ直ぐにセイメイを見つめる。

「ドウマンにも言ったけど、この薬草を分けて欲しいんだ……！ 勿論、僕自身を癒そうって訳じゃない……！ この子達のご主人って人を治してあげたいだけなんだ……！」

その言葉を聞いたセイメイは、ぼかんとした顔をして主を見つめ、あれ程あった圧はふっと消える。

「え？ 君が、人の為に……？ まるで最初の頃の君じゃないか！」

あつはつはつはつ！ と笑いながらセイメイはグツタリしてしまつたタマとマロを見る。

「なるほどなるほど、君達はご主人の為に、妖になったんだね」

そう言つて二匹を微笑ましい顔で見つめる。

「良いだろう、分けてあげよう!」

「ありがとう、セイメイ…」

主は頭を下げる。

「いいよ、君と私達は殺し合いをした仲とは言え、あれから1000年経ったんだ。人と妖の争いは続いているが、君が起こした『百鬼夜行』クラスの事は、1000年の間に起こってないよ」

「流石に起こされたら僕の面目丸潰れだからやめて欲しいなあ…あの子達が他の人についたら僕、立ち直れないや」

「ホント、昔に戻ったな君は」

そう言つてセイメイは式神を呼ぶ。

そうしてやってきた虎の式神は主へ威嚇しながら、セイメイに薬草を渡した。

「ほら、薬草だ」

ぽいっと投げ渡されるそれを主は慌てて受け止める。

「君ねえ!昔から物の扱いだよ!」

「いやいや、これでも改善した方なんだよ」

「そうだな、月に3回筆を粉碎する程度だ」

「それ改善したと呼べるのかい…?」

その事を聞いて呆れる主は、へたり込んだままの二匹へ薬草を渡す。

「ほら、約束通りの薬草だ。これで君達のご主人が治るといいね」

『お前は、どうするんだ?』

マロは主を見上げて問いかける

「僕は…あの人達とお話があるからね、君達を元の場所に送って、話をするよ」

『大丈夫なのか?』

「大丈夫さ、ああ見えて殺し合う前は三人で酒を飲み交わしたりしたからね」

そう言つて主は微笑んで、二匹を元の場所へ送る。

「さて、セイメイ、ドウマン。僕が蘇ったのには訳があるから、聞いて欲しいな?」

「こつちも1000年の間に色々変わったから教えないとね」

「そもそも、貴様があの時に堕ちなければ殺し合いにはならなかったが」

「:それは本当に悪いと思ってるよ:反省もしたしき:ああ、情報交換したらでいいんだけどさ」

そう言って、主は笑いながら言った。

「君達が封印した僕の『式神』達は元気なのか知りたいな!」



元の場所に戻った、タマとマロは駆け出す。

大好きなご主人の元へ

そうして、家に戻った二匹は

「けほ、けほけほ...タマ...?マロ...?何処...?」

ふらふらと外へ出ようとしている少年と慌てる両親を見た。

両親に怒られたタマとマロは縮こまりながらも薬草を渡した。

「全く、居なくなつたと心配したらこんな薬草を持ってきたか」

「でもこの子達が持ってきてくれたんだし、試してみましよう?」

そうして試した薬草は効果靨面、毒味をしようと飲んだ両親と嬉しそうに飲んだ少年は揃ってすやすやり

翌日には元気満々で両親の溜まった疲れも少年の病も消し飛び、両親は大喜び

タマとマロには少し豪華なエサが与えられた。

そうして暫く経ち、少年は両親に告げる。

「僕は、もっと色んな場所を見てみたい。だから、旅をさせて欲しい!」

そう言って土下座した少年を、両親は優しく撫でる。

「いいだろう、これは父さんと母さんでコツコツと貯めた旅の路銀だ
…お前を今まで狭い場所に閉じ込めてすまない」

「ごめんなさいね…」

「いいんだよ、父さん、母さん…僕の為に頑張ってくれて、こうやって
路銀まで用意してくれて、僕は幸せ者だよ」

「にやあ！」

「にやあう！」

「それにタマもマロも付いてきてくれるから、寂しくないしね！」

「…そうだな、行つてこい。…もし辛くなったら帰つて来い、ここはお
前の家なんだ」

「そうよ、いつでも帰つて来てね」

「うん！」

そうして旅立った少年と二匹は様々な場所を巡った。

その中で大屋敷の耳に入り、少年は呪術師として働く事になる。

少年は、呪術師になる事の引き換えとして両親に裕福な暮らしをさ
せて欲しいと頼み込んだ。

大屋敷の長は、それを了承した。

その日以降、とある呪術師の話が巷に広まった。

その呪術師は二匹の猫をお供にして悩みの解決をしている

その呪術師はまだ若いと言うのに、子供の面倒や老人の手伝いなど
を嫌な顔をせずにしてくれる

その呪術師と共に居る猫がヒトになる姿を見た、という者も居る。

しかしそんな話よりも確証のある話はこれだ。

その呪術師は口癖のようにこう言っている

「僕はこの子達に助けられて命を繋いだんです、だから僕も、生きてい
る間は皆さんのお手伝いをしたいんです！」

そう言つて笑う呪術師と側に居る二匹の猫は、今日も何処かで誰か
を助けている。

お気に入り300件突破記念 とある二匹の小狐の話

とある山奥に、朽ちる寸前の社があった。

その神様は人々の為にと知恵を与え、力を与え、今はもう無い村を見守っていた。

しかし村人達はいっしか神様を忘れ、作物が育たぬとなれば早々に村を捨て何処へと行ってしまった。

社から離れられない神様は荒れ果て、朽ちていく村をただじつと見つめていた。

神様はその中で、自分という存在が薄くなるのを感じていた。

『このまま時が過ぎれば私は消えてしまう。力だけの存在になれば、私は人々の天災として力を振るうままの化け物になってしまう』

神様は人に忘れられようと村が朽ちようと、神様の矜持として人への災いにはなりたくなかった。

『私の持つ力を全て使って、子孫を作ろう。』

だが最初から強力無比な力を振るえぬよう、制限を付けよう』

神様は自分の持つ力を使い、二匹の小狐を生み出した。

二匹の小狐は、社の神様を見つめる。

『私は、お前達の生みの親だ。だが：私はそろそろ朽ち果てる、お前達は私が化け物に堕ちない為に生み出ただけに過ぎない：故に、私はお前達が何をしようと許そう。妖を食って力を付けるのも良い、人に仕えるのも良い：お前達がのびのびと生きるのを、自然の中で見守ろう』

そう言い残すと、神様はサラサラと消えて行った。

二匹の小狐はお互いを見る。

そして、これからどうするべきかを考える

二匹は朽ちた社から離れ、草を分けて何処かへと歩き出した。

そしてそんな二匹が去って行くと共に、朽ちた社は崩れ去った。

二匹の小狐は生きる為にまず水を探した。

水と食料を探す、それが今の二匹にとつての最優先事項だった。しかし、探し続けても見つからない。

そうして時間を浪費していけば、徐々に日は傾いて行く。

日が落ちれば妖怪が活発的になり、森の中を闊歩し始める。

二匹は妖怪達から逃げながら、必死に生きようとした。

そしてその繰り返しを三日した二匹は、疲れ果ててしまった。

ふらふらと身体は揺らぐ

力もそこまで入らず、二匹は倒れ込む。

致命傷はないにしても、妖怪から逃げようとして出来た細かな傷は多く、地面には血が染み込んでいた。

二匹は思う。

自分達は、ここで死ぬのかと

嫌だ、嫌だ、嫌だ。こんな所で死にたくない、死ねない。

そう思つて立とうとするも、身体はびくりとも動かない。

そんな二匹の元に影が差した。

それは一人の若い人間だった。

二匹は死を悟る。

しかし、その人間は札を出すど何やら唱える。

二匹は吸い込まれる感覚を覚え、抵抗しようとしたが、そんな力は身体に残っていないかった。

そうして吸い込まれた二匹は、これからどうなるのかと不安になる。

しかし二匹の不安は当たらず、その若い人間に世話をされ、生きる事になる。

そうして生かされた二匹は名を与えられた時に、一つの誓いを立てた。

『この救われた命、貴方の為に使います』

と
そうして誓った二匹の小狐は、様々な経験、死闘を経て九尾へと至る。

そしてその二匹は九尾に成ったその夜に、朽ち果てた社を訪れた。朽ち果てた社はもうそこにはなく、ただ草が生い茂るのみ

辛うじて、社の土台だった石がそこにはあった。

「私達を生んでくれてありがとうございます、神様」

「生んでくれなかったら、私達はこんな幸せを得る事もなかった。ありがとう」

そう告げる二匹の頭をそよ風が優しく撫でる

まるで、成長した子を優しく撫でる親のような、そんなそよ風だった。

新年の呪術師達

正月、それは人々が新年を祝い、今年も無病息災であれと願う大切な日

そんな日でもここ、大屋敷の呪術師達は仕事をしている…

「よーしーお前ら飲んで騒ぐぞおおおー！」

『うおおおおお!!』

…訳もなかった。

大人の呪術師達は酒をあおり、料理を摘む。

子供の呪術師はみんなが集まって料理を食べながら今年はどうしようかと話をしている。

そんな騒がしい大屋敷の中で静けさを保っている場所が三つあった。

ひとつは大屋敷を管理する大頭の部屋だ。

ここの大頭は酒好きで宴会好きとは言え、新年を祝うよりも大変な事で頭を抱えていた。

「セイメイ様が…今年も来る…」

机の上には

やあ！一年が経ったし、僕自らでそれぞれの大屋敷を視察します。もし不正や何かあれば…わかるね？

…と、割と達筆な字で書かれた紙が一枚。

これは新年名物となっている大屋敷の視察であり、緩んだ時を狙ってセイメイがやってくる。

大頭達はそれぞれ、きちんと職務を全うしているもの。新年に1000年も生き続けているセイメイが来るとなれば…お腹も痛くなるし、頭も抱えるし、料理の手配どうしようとか考えてしまう。

「ともかく、最高級の酒と料理でもてなそう…」

新年始まって早々の大仕事に、大頭は溜息を吐いた。



そして次に静けさを保っている部屋はシユリの部屋である。シユリは騒がしい空気が嫌いであり、新年は毎回部屋に籠っている。

しかし、今年はどうやらひとつ違いがあるようだ。

「よし、これくらいでいいかしらね…」

そう言っつて息を吐くシユリの目の前には、豪華な食材をふんだんに使われたおせちがあった。

シユリはいそいそとそれを包み、ある場所へと向かう。

そんなシユリを後ろで見守りつつ、シユラとモミジは年末の事を思い返す。

くくく

時は年末、シユリは毎年三人で食べるおせちを作りながらブツブツと文句を溢していた。

「クラマったら、年末だつて言うのに年越し蕎麦も食べないですつと部屋に籠るなんて……新年になったらおせち、分けてあげなきゃ……お腹空かせてるかもしれないし……」

そう言っつてテキパキと自分達の食べる分とクラマの分を分けるシユリを見ながら、シユラとモミジは思う

(シユリ、美味しいやつとかを優先して移してないか?)

(しかも割と高いものを移してますね……偶には高いものを食べながらクラマと笑い合いたいんでしょうか)

せつせとクラマ用のおせち箱へ詰めているシユリを見守りながら、シユラとモミジは食べたい分を確保する為に腰を上げた。

くくく

そんな訳で出来上がったクラマ用おせちを持ちながら、シユリはクラマの自室を目指す。

クラマの部屋は大屋敷の騒がしさとは無縁な程に静かだった。

「クラマー、開けるわよ」

ガラリと開けた先に、シユリが見たのは

「あるじ様、あーんですよ」

「あるじ、こつちも美味しい」

「二人とも、そんな一気に食えないってばっ!」

シユリの持つてきたおせちに負けない程豪華なおせちと、それを摘んで食べさせようとしているキンコとギンコ。

そして、若干お腹の膨れて来たクラマの苦笑이었다。

「く、クラマあ…!新年早々に何やってんの!」

おせちをすぐ横へ置いて、シユリは怒りを露わにしながらクラマへ詰め寄る。

首根っこを掴んで説教を始めたシユリとクラマをよそに、シユラとモミジはおせちを掴む。

「お、中々いいな」

「割高だったと思いますがこれは…美味しい」

しかし、摘んだのはクラマの為にキンコとギンコが作ったおせち

「貴様…!」

「あるじのおせちを食うな!!」

当然怒りを露わにしたキンコとギンコに飛びかかれ、もみくちやになる。

そうして今年も、騒がしい声が響く大屋敷の上空では

「いやー、この大屋敷は毎年見てて飽きない。いつも活気に溢れて騒がしいからね!」

セイメイは龍の式神に背を預けながら、眼下の大屋敷を見て笑う。

「さて、じゃあ今年もやろうかな。はいっ!よろしく!」

セイメイの声に反応した龍はその口を上空へ向けて上げる。

「ゴアアア!」

龍の顎から放たれた浄化の息吹は、雲に入り込んで雪と混ぜって降り始める。

雪だ、雪だ!とはしゃぐ子供や、それを見守る大人達。

都の人々の笑い声と大屋敷の騒ぐ声。

それを聞きながら、セイメイは笑いながら高らかに声を上げた

「今年も良い一年でありますように！」

不穏な山 前編

クラマは任務の為にとある山を訪れていた。晴れやかな空模様の中で、その山の上にはどんよりとした雲が風によって動く事もなく居座っていた。

クラマは任務として与えられた紙を見直す。

「その山に濃密な妖気の気配有り。その正体を調査し、可能なら討伐すべし」

その紙を見直したクラマは改めて山を見る。

乱雑に生えた木々に鬱蒼と生える雑草。

その山からは野生動物の鳴き声などせず、風が吹く事もない。

そんな不気味な山を見ながら、クラマは呟いた。

「これ明らかに僕が行けるレベルじゃないよな」

クラマは強さ的には中の上だ。

潜在的な強さは相当とは言え、キンコとギンコの式神の契約が切れている時点でその潜在的な強さは化け物クラスであるセイメイやドーマンには遠く及ばない。

もし、この山を九尾や鬼などを始めとした高位の妖が根城にしていた場合、何の対策もせずに踏み入れた瞬間にクラマは遠隔からミンチにされてしまう。

更に都合の悪い事に、相方であるシユリは別件で駆り出されており、キンコとギンコは定期的に来る周期のモノによって動けず自室に籠っている。

他の呪術師達もそれぞれの依頼や任務に駆り出され、大屋敷で動かせる人員はクラマだけだった。

つまりこの場にはクラマ一人しか居ないのだ。

一応、クラマも自分の出来る限りの耐性付与や符や札を持参した。

しかし、いくら小細工をした所で高位の妖はその溢れる妖気で消し飛ばして来る。

分かりやすく言えば常に『いてつくはどう』を放って来るのだ。

クラマはそれをよく理解している、伊達にキンコとギンコという九尾と共に過ごしていない。

「符術『絡繰操糸』」

クラマは念には念をと、自身に一つの符を使用する。

符は問題なく発動し、内包された力を発揮した符は燃え始めポロポロと崩れ去った。

これはクラマが気絶もしくは死亡した場合、符によって付与された糸で身体を動かして逃走と自身の身体の一部を喰らった妖を自害させる為だ。

不思議な事に符によって付与された呪術は並の妖の妖気であれば解除される事がない。

札と符の開発者たる高名な呪術師曰く、『札は霊力による干渉、符は内包した力の付与である』との事。

簡単に言ってしまうれば札は使用すると霊力を消費して発火を始めとした自然現象を発生させたり札を中心とした爆発など、基本的には周りへと干渉する。

符は逆に符の中に内包された力を身体に纏わせるもので、これは発動すると基本的に効力がなくなるまでずっと残る。

呪術師は基本的に札を愛用している中、クラマは符のとある特性を理解している為符を好んで使っていた。

その符の特性というのが、捕食などによって妖の体内に取り込まれた場合に付与された力が妖のモノになるというものだ。

これは呪術師にとって不利な特性だった。

何せ式神や自身に付与した力を、相手は身体の一部でも捕食してしまえばその効力を受ける事が出来てしまう。

この事もあって、場数を踏めば踏むほどに呪術師達は札を使う機会が増え代わりに符を使うという事自体が減っていく。

クラマはそんな符の弱点を逆手に取り、改良を重ねた結果…人と妖で効力を分ける事に成功した。

そしてこの工夫は、符を新米や中堅の呪術師に分けている現在でもバレていない。

最後の保険をかけたクラマは山へと足を踏み入れた。
：この最後の保険をかけた事が、クラマの生死を分ける事になつた。

不穏な山 後半

山へと足を踏み入れたクラマが感じたのは、静けさだった。

虫の声や草の靡く音さえせず、あれ程に強かった妖気も入ってしまった。うと何故か感じなくなつた。

しかし、妖は妖気を意図的に隠す事もできる。

その可能性がある以上は警戒しなくてはならない

その事を頭に入れたクラマは札を使って符の杖を精製する。

この杖があれば、様々な効果の符を使い分けながら戦闘中にさりげなく補充する事も出来る。

そうして生成した杖を持ちながら、クラマは少しずつ山を登り始めた。

「しかし、妖や野生動物の気配が無いな…」

本来の山なら、妖は居ないにしても野生動物や虫が居たりする。

しかし、その気配がひとつもない。

この事にクラマはひとつの出来事を思い出す。

それはクラマが生まれる前に起きたとされるとある山の神の『災厄化』だ。

そもそも山の神はその山を支配する者であると同時に、その山の力そのものなのだ。

そして、その山の神の力の根源は人の祈りだ。

つまり、祈る人が減る程に山の神はその山の気質に囚われやすくなる。

もし人々が山の神に祈る事を忘れ、妖が跋扈するような山へと変貌した場合

その山の神は妖へと身を堕とすだけではなく、その山の生命を食い尽くす。

そうして取り込んだ魂を咀嚼し、大体は獣の姿を取って『自分を忘れた』人々の所へ向かおうとする。

この行動が呪術師泣かせな程に早く、追いついて倒すとなつても元は山一つを治めていた神様だ。

そこに妖としての能力と更なるパワーアップがプラスされる
正しく『天災』の如き力を発揮して中級程度の呪術師などは攻撃する前に仲良く挽肉にされる。

じゃあこんな化け物にどう勝てというか話だが
手っ取り早いのはセイメイやドーマンなどの化け物クラスに対処して貰う事だ。

しかし現実的ではないので熟練の呪術師達をかき集め、その神の討伐を全力でやるしかない。

しかし、今回は戦える人員ががクラマのみだ。
そしてクラマ一人では到底勝ち目はない。

山の異様な雰囲気と、妖はおろか虫すら居ないという調査結果。
それだけで既に撤退しても良いのではないか？
クラマはそう考えた。

そうと決まれば撤退準備である。

即座にクラマは緊急用として支給された帰還の札を使用する。
しかし、その札は黒い炎に焼かれて燃え尽きた。

「っ!？」

その時、クラマは異様な気配が背後の方から迫るのを感じた。
急いでクラマは山を降りる。

おお…ヒトの子だ。しかも大層な霊力を備え、更に旨味のある匂いがあるのではないか…!

その声が山中に響く。

それと同時に、クラマの四肢を木の根が貫く。

「がっ!？」

急いで木の根から手足を抜くと、ズルズルと木の根は地面へ潜る。

ああ…お前の血…甘露…甘露…！お前はどうかやら私への供物のようだ…!

その言葉と共に、クラマの肉体を先程より多くの木の根が貫く。

「が…はっ…!？」

貫かれ、宙に浮くクラマの目の前に

怪しく目を光らせ、クツクツと笑う白狐が居た。

(…山の神じゃない…！宇迦之御魂神…その末端が管理する山だったのか…こは…！)

「ああ…その目…あの狐の神の御使と思っっているな？…違う、私はこの山の神だっ!!」

轟、と妖気が勢いよく溢れ出しクラマに叩き付けられる。

「あの人間どもが…！あの人間どもがああ…！我が社を守り続けてきた家臣と言えるあの子らを…犯して、殺して…許さぬ…許さぬ許さぬっ！許しておけぬっ！」

怒りのままに地面を踏み砕き、牙を見せながら吼える神だった者は、すつと目を細めた。

「お前、私が妖の身に堕ちた…と思っっているだろう？違う、私は元々…妖から神になった者だ！…それ故に正気だ…安心しろ、お前を殺しはしない。血も十分に頂いた…解放してやろう」

木の根がズルリ…とクラマから抜かれる。

それと同時に倒れ込むクラマを、堕ち…いや、妖へと戻った神が投げかけた。

「お前、自分に術をかけたな？…忌々しいが、それがお前達の足掻き方でもある…だが私には効かぬよ」

自身の周りに現れた半透明の青い糸を、その妖はブチブチと引き千切る。

「どれ、少しは治してやる…しかし良かったな？遭遇したのが私で…もし、正当な山神であつたら、お前は八つ裂きにされた後に喰らわれていただろうよ」

妖術によつて傷を塞がれたクラマは、起き上がろうと腕を地につける

「無理をするな、お前は死にかけよ…故に気絶させる…そうすればお前の術は起動するだろう？」

そう言つて、妖はトンとクラマの額に指を置く

たったそれだけでクラマはぐったりとして動かなくなるも、宙に現れた糸が無理やり起き上がらせる。

「おお…しかし面妖な術だ…まるで…大昔にあつた大戦の時と同じで

はないか」

妖の言葉には目もくれず、ひたすらに糸に操られたクラマは大屋敷に向けて走り出す。

それを妖は手を振って見送った。

そして、その日の夜。

とある捨てられた山に、無惨に殺された山賊どもの死体が転がっていた。

どれもこれも、獣に引き裂かれたような状態だったそうだ…

それと共に、クラマが調査に向かった山から山の神が消えた。

クラマの報告により、山の神を捜索する部隊が編成された。

しかし、その神は見つかっていない。

動けずのクラマ

クラマは自室で痛みを悶えていた。

何せ四肢に大穴を開けられた上、妖から傷口を塞ぐだけしかされず更に術の発動で無理やりその大怪我した四肢を動かしたのだ。当然ながら怪我は余計に酷くなった。

「あ……ぐ……」

「あるじ様……!」

帰って来てすぐにキンコがクラマの異変に気付き、そのまま一晩中付きつきりで固有能力を使い傷が塞がったとはいえ痛みは残ったまままだ。

少しでも動かせばズキリと痛みが走る。

それ故に、現在のクラマはキンコとキンコに付きつきりで看病されている病人だ。

しかもキンコの見立てでは後3日は動けないとの事、致命的過ぎる。

しかし、3日動けないとは言え仕事は割り振られる。

ただその仕事は向かった山の詳しい書類を作る事のみの方に、キンコがクラマから聞きながら書き記したので、今日の昼には終わる。

そして、その書類が終わればクラマはフリーだ。

ただ身体をロクに動かせないので自由が殆どないが

キンコが書類を書き終わるとほぼ同時に食事の時間になる。

するとキンコが座椅子を持ってきて、壊れ物を扱うように慎重にクラマを座椅子に座らせる。

「あるじ様、痛い所はありませんか?」

「ああ、大丈夫だ……」

クラマが座椅子に座るとほぼ同時にキンコが食事を持って来る。

「あるじは大怪我をした、沢山食べる必要がある」

そう言っただけで置いた食事のラインナップ。

まず目に飛び込むのは焼かれた鯛だ、しかもそこそこの大きさでク

ラマ一人では全ての身を食べ切れない。

次に目に入ったのは炙られた鴨肉だ、しかもまるまる一匹を焼いてある為にこちらも大きい。そしてクラマは食べ切れる気がしない

残りはご飯に味噌汁、お漬け物だ。しかし量は普段より多い

どう考えても一人で食べ切れる量ではないそれらを見たクラマは、ギンコを見て言った。

「ギンコ、普段よりだいぶ…量が多くない？」

「…ん？量が多いのは普通、あるじはまずいっぱい食べるべき」

そう言つて鯛の身をほぐして箸で摘むとクラマへ向ける。

「あるじ、あーん」

「え…？」

困惑するクラマへ、キンコが告げる。

「あるじ様は手を動かさせません、ですので私達で食事の補助を」

「そういう事、だからあるじ…口開けて？」

「あ、あー…」

開けた口の中へひよいと鯛の身は入れられる。

咀嚼すれば確かに美味しい。

「ん、美味しい…」

「よかったです、あるじ様」

「じゃあ、次行こう」

そう言つてキンコとギンコにあーんをされながら、クラマは食事を進めるも

「も、もう無理…」

四分の一程度でギブアップしてしまう。

「では、残りは私達が貰いますね」

ギンコが残った料理を下げ、キンコが尻尾でクラマを楽な姿勢になるように支える。

「これがあと3日続くのか…」

「はい、それまでは私達が付きつきりで看病しますので」

「あるじはしばらく、食べるのが仕事になる」

「…：…：太りそう」

クラマは筋肉質とは呼ばないにしても締まっではいる体を見て
いた。

そして三日後、無事に少しだけふっくらしてしまったクラマは
「筋肉を付け直さなくては…」

そう言っつてキンコとギンコに見守られながら筋力トレーニングを
始めた。

よくある結末

「ちっ、数が多過ぎる！」

「式神もやられちゃったし…抑えきれない…！」

二人の呪術師は、とある洞窟にて妖怪と戦っていた。

しかし、数が異常な程多く苦戦し式神を使うも無惨に食い殺され、退路は崩落によって塞がれた。

「ちっ、ここは俺がコイツら諸共自爆する！お前はあの崩れた隙間から逃げろ！」

そう叫びながら呪術師の男は襲いかかる獣の妖怪を刀で斬り捨て、死角から襲いかかる妖怪は札で爆散させる。

「で、でも！」

「でもじゃねえ！こんなに異常な数なんだ、どっちか大屋敷に行って伝えれば増援は来る！そもそも俺もここで死ぬつもりはねえ！」

「…っ、分かった！」

「なら行け！」

女の呪術師は退路を塞ぐ妖怪達を札で吹き飛ばし、瓦礫の隙間から抜け出す。

それを見送った男の呪術師は、覚悟を決めて赤黒い札を構えた。

「妖怪ども！お前らはここで命に換えても殲滅する！」

そうして札に込められた力を解放しようとしたその時

ぐちやあ

そんな音と共に、男は浮遊感を覚えた。

「な、にが…？」

体が前に傾き、視界がゆっくりと下へ向く

男が見たのは

自分の下半身を咀嚼する、巨大な狼の首だった。

「…っ！」

それを見た時、男は理解する。

自分はまだ生きている、ならば後続の為にも少しでも妖怪の数を減らすべきだと

「札よ、その力を解放せよ……」
ベキョツ

男の言葉は続かなかつた。

口を開き、道連れみちづれの札ふだを使おうとした男は

狼の前足によって洞窟の岩壁に叩き付けられ、岩壁のシミになつた。

男を殺した狼は誇る訳でもなく、退屈だと言うように欠伸をする。

あれ程群れて襲いかかつていた妖怪達も、狼が現れると共に洞窟の奥へと引つ込んでいた。

そのまま狼は口からペツ、と異物を吐き出す。

それは鋼鉄製の足だった。

狼はそれを忌々しそうに踏み潰し、洞窟の奥へと戻る。

そして洞窟の中は静寂に満たされた。



「はあ、はあ、生き延びなきゃ、生き延びて助けを……！」

瓦礫の隙間から抜け出した女呪術師は、森の中をひたすら走る。

獣妖怪が襲いかかるも、その全てを蹴散らしてただ大屋敷に向けてひた走る。

「おお、そんなに急いで何処へ行く……！」

しかし、そんな彼女を透き通るような声で呼び止める者が居た。

足を止める事が出来ないはずなのに、女呪術師の足は止まってしまうた。
まった。

それと共に女呪術師は察する、自分はここで終わってしまうと

女呪術師は、一枚の札を袖の中に忍ばせる。

この札は伝令用の鳥の式神であり、その呪術師の記憶を写し取り、他の呪術師へ伝える為の式神だ。

女呪術師はここで死ぬとしても自分の持つ記憶だけでも送れば良いと考え、相手の出方を伺う。

「なんじゃ、黙りか？つまらぬのう…」

そう言って声の主は森の奥から現れる。

「っ…!?白面金毛九尾!?!」

そう呼ばれた女は、コロコロと笑って告げる。

「その通りその通り、妾こそ白面金毛九尾…お主らに言わせれば『玉藻前』よ…殺生石からこうして蘇ったという訳じゃ…」

女呪術師は、即座に袖から札を森へ向けて投げる。

「むう？ヤケになったかのう？まあ良い…お主は妾の依代にしてやろう…光栄に思うが良い…」

そう言っていると、玉藻前は目を金色に輝かせる

「っ…あ…あ”あ”…!?」

「何、すぐには乗っ取らぬ…じわじわと苦しめながら少しづつお主を妾に染めてやろう…クク…クフフフ…!」

女呪術師は叫び声を上げながらのたうち回る。

しかし、どれだけ叫び声を上げようと、女呪術師と玉藻前以外の存在がその場に現れる事はなかった…

お気に入り1000件突破記念 あるじサマを探す者

そのバケモノは、何もない空間をひたすらに歩いていた。

途中、様々な世界をそのバケモノは見た。

筋肉で全てを解決する主を見た。

妖怪に襲われ、無惨に死ぬ主を見た。

自分達と出会う事なく、平凡な呪術師として生きる主を見た。

しかし、どの主もバケモノからすればただの『有り得たかもしれないif』の存在であり、自分の望んでいる主ではなかった。

バケモノは、自分が生まれ直した時に一瞬だけ見えた主の姿を思い出す。

『行くよ、キンコ、ギンコ』

自分の主よりも少し凛々しくなったその横顔と、かつての名前を呼ぶ主の横顔をバケモノは鮮明に思い出した。

「ああ…あるじサマ…あるじサマ…もうすぐです…もうすぐ、会えます…！」

そう言つて、バケモノはその腕を虚空に叩きつける。

ピシリと、何もない虚空に亀裂が入った。

何度も何度も、狂ったように腕を叩き続けるバケモノは…その腕を一度止めた。

「…おかしい、この程度すぐに叩き割れるはずだと言うのに…！何故、何故…何故何故何故何故…！つ…あ”あ”あ”！」

腕を振りかぶって叩きつけられた拳が、虚空に大きな亀裂を入れた。

その亀裂を見たバケモノはそのままこじ開けるように両腕で亀裂に手をかけ、引き裂くように開いた。

開かれ、侵入した場所は深い森の中だった。

空は快晴で日差しも心地よい…がその全てはバケモノからすれば

どうでもよかった。

この世界に、自分の望んでいる主が居るといふ事実だけが、バケモノに取って重要だった。

「…はあ…はあ…やつと…やつと来れました…後はあるじサマを探すだけ…」

そのままズルズルと尾を引きずって歩き出したバケモノへ、獣妖怪が複数匹飛びかかる。

「邪魔だ…」

軽く腕を振るうだけで、獣妖怪達は破裂し辺りに血肉を撒き散らす。

「あるじサマはどこでしょうか…っ…！」

再び歩き出そうとしたバケモノは不意に辺りが変化した事に気付く。

足元から徐々に霧が発生し、辺りを包み込んだ。

「クフフ…そう警戒するでない…妾は味方じゃぞ？」

背後から聞こえた声に反応し、バケモノは尾を動かして背後の者を貫こうとする。

「手荒いものじゃのう…こちらは何もせぬというのに…」

そう言つて、背後の霧の奥から着物を羽織り、鉄扇一つで全ての尾を抑え付けながら一人の女が歩いてきた。

「妾は玉藻前…お主の味方じゃ」

「誰であれどうでもいい…私の邪魔をするな…」

「まあ待つがよい、お主にとつても都合が良い話じゃぞ」

そう言つて玉藻前は尾を跳ね除けて言う。

「妾…いや、妾の同盟者からの言伝じゃ。『お前の欲する存在を手に入れる為に力を貸す、代わりにお前の力を貸せ』とな」

「力を借りなくとも、あるじサマを手に入れるのなら私一人で…」

「ふん、妾に攻撃を防がれる程度の貴様が、晴明や道満、あの2匹を相手取れると思えぬが？」

そう言つて玉藻前は笑う

「チツ…」

「大人しく妾と共に来るがよい、なに…貴様の望むモノには手を出さぬ…」

「……わかった」

「クフフフ…」

玉藻前とバケモノは…霧の奥へと姿を消した。

そして霧が晴れたその場所には、ただ枯れた草木が残るだけだった。

都の異変

「はー…ここ最近妖怪が出て来ないな」

大屋敷で日向ぼっこをしながら、一人の男呪術師が呟く

「俺たちが祓いまくってビビってんじゃねえか？」

その言葉を聞いたもう一人の男呪術師はケラケラと笑う

そんな二人の背後に立つ一人の陰

「貴方達がそんなに祓ってる訳ないでしょ、うちの大屋敷で一番祓ってるのはクラマ様とシユリ様じゃない！しかも殆どが放置したら危険な妖ばかり…私達が適度な強さの妖祓えてるのもお二人のお陰なのに、貴方達は…！」

青筋を立てて拳を握り締めて振り下ろさんとする女呪術師に男二人は

「ヒイツ!? 鬼女!」

「拳骨女じゃー!」

ビビりまくって逃げ出そうとした。

「誰が、鬼女に拳骨女だー!」

そう叫んで振るわれた拳は男達の脳天をぶつ叩いた。

「いってえええ!」

男二人の悲鳴が大屋敷に響いた。

――

場所は変わり、大屋敷にある大頭の部屋。

大屋敷の長である呪術師は、紙の束を読んで頭を悩ませていた。

「…都での行方不明の者の増加…だと?」

大頭である呪術師が悩んでいたのは、正確には行方不明者が増えた事ではない。

そもそも都と言っても、治安としてはまずまずで治安維持として主要な場所には兵の詰め所があり、兵が一定区画を定期的に巡視している。

もちろん、都の全てを兵が見て回っている訳ではない。

『色を売る店』や怪しい人物が商いをしている区画も存在しており、ここでは兵が居ないが、そこに住む人々によってある程度の治安は保たれている。

ただし、定期的に人が行方不明になるのが年間を通して数件は存在しているが

大頭も、そういう『暗い場所』で起きる不幸な事については黙認している。

…真に恐ろしいのは妖ではなく、人間なのだ。

しかし、それを含めたとしても

「……たったの三日で行方知れずの者が100人…更に何も痕跡がないとは」

そして行方不明になった者達を最後に見たという場所も点でバラバラ、更に老若男女関係なく行方不明になっており、その全員に何かしらの共通点がある訳でもなかった。

これを重く見た都が、呪術師へ助けを求めたという訳である。

「…しかし…な」

大頭はこの大屋敷にてこういう状況でも大丈夫な呪術師を思い出す。

始めにクラマ、九尾の式神を二体持ち、本人も失せ物探しは得意であるものの、未だに山での調査による傷が癒えておらず動く事が出来ない

次にシユリなのだが…生真面目な為に要請をすれば二つ返事で受けてくれるのは確かであるものの、もし都内で妖との戦闘になった場合、シユリと操る二体の鬼によって都が半壊するのを幻視した為に却下

そして、大頭はふと思い出す

「…そう言えば、最近入ってきた猫又の式神を扱う呪術師の子が居た

な…」

彼なら大丈夫だろうと、念の為に彼よりも場数を踏んでいる呪術師を三人付けて行方不明者の搜索を命ずる書簡を大頭は書き始めた。

――

「ああ…良い良い…人の墮落した様を見るのは心地よいのう…」

都の影である区画にある『色の店』

その中で一人の女がクツクツと笑いながら、見つめていた

「あ…ああ…」

「…う…あ…？」

「あへ、あへへへ…」

だらしなく顔を緩ませて笑う男に、惚けた顔で手足をバタバタ揺らしている女、身体を小刻みにビクビク震わせている子供。

老若男女問わず、100人はくだらない人々が折り重なるように床に並べられていた

「攫い、幻術にかけ、徐々に墮落しながら、生命力を奪い取る…ふふふ…このような事が出来てしまうほど、あの方が言うように呪術師は腑抜けたようなのう…」

そう言って笑う女は、途端にスツと脳面のように顔から感情が消え失せる。

「しかし…しかしだ…この私が、こうして楽しみながら血肉を得られると言うのが、あの忌々しい狐どものお陰というのは腹が立つな…」
苛立つままに腕を振るえば、寝転がる人々の一部が爆ぜて辺りに血肉を撒き散らす。

その撒き散らされた血肉は、何処からか現れた狸達が喰らい啜られる。

しかしそんな状況であつても他の人々はただ虚空を見て声を出すのみ

「ああ、憎い、にくい！ …だが利用出来るなら利用してやる。貴様ら狐妖怪どもは…いずれ我々に敗北するのだからなあ…」

イラついているのか、変化が一部解け、タヌキの耳と尻尾が露わになる。

「あの方に気に入られていると笑う玉藻前とその配下どもに、その玉藻前が連れて来たよく分からぬ狐妖怪め…今に見ている…我らタヌキ妖怪が都を侵蝕し、力をつけあの方に気に入られ、そうなった時はお前達を滅ぼしてやるからなあ！」

そのタヌキ妖怪はそう叫ぶと、寝転がる人々へ近寄り

「手始めだ…少しは滅つたが…お前達を手駒に都を乗っ取ってやる…！」

そう言う人と人々に手をかざす

「恐れる人間、恐れよ呪術師！タヌキに化かされ一つの都が破滅する…その瞬間が楽しみだ…」

ニイイ…と口が裂けると思う程に口角を上げてそのタヌキ妖怪は笑う

そしてこの次の日

大屋敷に行方不明者達の『一部』が無事に帰ってきた事が知らされた。

狸の化かし

「はい、分かりました！頑張つて残りの方を探します！」

大頭に残りの行方不明者の搜索を頼まれた少年は元気に応えた。

「君はまだ入つて一月も経っていない、念の為に熟練者の呪術師を三人付ける。異変を感じ己の手に余るのなら無理なく離脱せよ」

「はい！」

そう言つて少年は都へ向けて飛び出し、三人の呪術師が腰を上げて後続く。

そのまま都を歩き少しした時、少年は行方不明者リストを見ながらふと気付く

「そういえば、一部の方は帰つて来たんですよね？」

「そうだな、何かされた痕跡はなかった。汚れひとつもないのが逆に不気味なくらいな」

「とりあえずその帰つて来た方の所に行きましょう！何か知ってるかも」

そう言つて少年は走り出す、三人も慌てて後を追う

「まったく、子供は元気なものだのう」

「しかも、オレ達よりも足が速いと来る」

「この速さなら最悪あの子を逃すくらいはやれるだろう」

走りながら三人はさつと最悪の場合誰を逃すかを決める。

そのまま三人は少年を見失わないように後を追つた。

――

都に立つ古めの平家に辿り着いた少年は戸を叩く

「すいませーん、呪術師です！お話を聞きたいのですが！」

しかし反応がなく、少年はおかしいなと怪しむ

「うん？おかしいな…戸は…あれ？開かない」

そうしていると三人が追いつく

「すいません、この戸が開きません」

少年が振り返ると同時に、戸がドロリと溶ける

「いかん！」

「うわっ!？」

三人のうちの一人が少年の襟を掴み引き戻す。

先程まで少年の居た地面に、鋭い爪による引つ掻き傷が現れる

「バカな、この大きさ…相当の化け狸か！」

「周囲警戒！既にここは狸の術の中と思え！」

三人は少年を囲むように立つと札を構える

「少年！自体は思ったよりも深刻だ、化け狸がこの都に巢食っている…奴らは『狸の呪』で人を化け狸同ジモノにさえ落とし込める。ここが化かされているのなら都の本元も危ういかもしれん、ワシらが道を開く、早く大頭に援軍を呼ぶように伝えよ！」

そう言うと共に放たれた札が辺りに業火を巻き起こす

そして空間がぐにやりと歪み、子供一人が通れるほどの穴が現れる

「あそこが術の綻びか！行ってくれ少年！」

「うわっ!？」

一人に体を掴まれた少年は穴に向けて放り込まれる

「み、みなさん!？」

「安心しろ少年、ワシらはこれでも強い」

「走って援軍を呼んで来い、なあに、この程度はオレたちで倒せるが、都の至る所がこうなら手が足りないからな」

「分かりました！」

少年がそう答えると共に穴は閉じた。

「さて、わざわざ人を逃すというのだから、ココに居るヤツは余裕がありそうじゃの」

「なあに、向こうが術張ってんだ。さっさと術者の妖を殺して出るぞ」

「来るぞ………なっ!?! 貴様は!」

三人の前に現れた狸妖怪が手を上げれば、巨大な獣の腕が現れうざったい蚊を落とすように振り下ろされた。

――

「はあ、はあ、急がないと!」

走る少年の視界の端では、至る所の家屋が燃え、泣き叫ぶ声、怒声が聞こえる

更にさっきまで見なかった狸達があちらこちらから現れて走り回っている。

飛びかかって来る狸を避けながら、少年は大屋敷に辿り着く。

「そ、そんな…!?!」

しかし、目に飛び込んできたのは

火が燃え盛り崩れて行く大屋敷だった。

狐の策略

燃え盛る大屋敷のその中で

「おーおー、よく燃えておるのう?」

「ちつ、何故封印が今解けている、玉藻前!」

大屋敷の大頭である男は、札を構えて玉藻前を睨む

「クフフ、なあに。そのような瑣末な事は気にするでない。今の妾は同胞の為に少々手を貸す為に来たまでじゃ：今頃彼奴の欲している者を手に入れている頃じゃろう：それにしても、外は狸どもでうるさくて敵わぬのう：帰る前に人間と纏めて滅ぼすかのう：」

「玉藻前：何故目覚めているのかは分からないが、ここで貴様を再封印する！その為に我々は選ばれているからな!」

「ほほう? 貴様程度の若造が、この妾を封じると：?：?：?：舐めるなよ、若造」

そう言うのと玉藻前の妖気によって炎が鎮火する。

「貴様程度の呪術師が、妾を封じれる訳がなからう」

そう言って扇子で口元を隠して笑う。

「舐められるのも今のうちだ、行くぞ!」

大屋敷の中で、巨大な霊力と妖力が衝突した。

――

そして、場所は代わり、クラマの部屋。

「ふー：：：ふー：：：」

「触れさせない：：：」

傷だらけの身体を引きずりながら、キンコとギンコは眠ったままのクラマを守るように立つ。

「ああ：主サマ：主サマ：どうして邪魔をするのです?」

金と銀のオツドアイの瞳は、クラマをただじつと見つめていた。

「妖気が桁違いに高い…お前は何者…?」

そう問いかけるギンコに、その者は告げた。

「私は、別の世界の貴方達です…姿形は違えど、見た目からして分かるでしょう?」

そう言っただけになっただけの金と銀の6尾をゆらゆらと揺らす。

「私の世界の主サマは、私が弱いから死んでしまった。ですが…別の世界に同じ色の魂の主サマを見つけたのです…かけつけるのは当然でしょう?」

「いくら、別の世界の私達だとしても」

「あるじには触れさせない!」

「残念です…私と貴女達が力を合わせれば、この世界の邪な妖などすぐに消して、主サマを愛する為の『巢』が作れると思ったのに…」

その言葉に、ピクつと二人は反応する。

「…待って、あるじの敵じゃないの?」

「いえ、私も…この世界に来た頃は自分だけの主サマにしたいな…と思っていたのですが…」

こっさり…貴女達と主サマを見て思ったのです」

そう言っただけと息を吸う

「こんなに可愛い主サマなら独占するよりも軋轢を生まない為に共有して、邪な妖などさっさと消して三人でじっくりたっぷりと快樂に墮としてしまえば良いのでは…と♪」

そう言っただけ両手を合わせてにっこりと笑う

「貴女…」

「天才だったの…?」

ギンコとギンコは驚愕するように口を開ける。

二人はこの一瞬の間だけ、バカになった。

「戦力的に考えて協力した方が目的が早く達成されますよ? 貴女達は私が至れなかった九尾に成って

私はこうして混ざり合い、どの狐妖怪にも属さない新たな狐妖怪になっただけです。

三人で力を合わせれば、簡単にこの世界の邪な心を持つ妖を殲滅できるとしよう♪」

そう言つて、名案だと言うようにその者は笑う。

「でも、私が九尾に至ったとしても、強い妖はまだ居ます」

「それに、貴女がどれだけ強いかも分からない」

「ふむ…では、この都で暴れ回る狸達の殲滅と、玉藻前を再封印を同時にしてしまえば納得しますよね？」

「は??」

その言葉に、二人はポカンとした顔を晒す。

「できる訳ない、出来たら都も大屋敷もこんな事になってない！」

「幾らなんでも無理があります！」

そう言つて抗議するキンコとギンコに、その者はさらりと言う

「まあまあ…見ていて下さい。大体3分で終わりますので」

そう言うと、手でささっと印を切る。

それと同時に、その者から莫大な妖気が光となって溢れ出る。

「は?」

間近で見たキンコとギンコはその妖気に真顔になって光に包まれ

「む!?!なんだこの妖気の強さは!?!」

「むう?あの者、こんなに妖気を発して何を…」

戦っている最中の玉藻前と大屋敷の大頭は戦闘をやめて妖気を感じた場所に目を向ける。

「なんだあれは!?!防護結界！」

「くっ、まさか彼奴め、裏切ったか!!だがそのような術…妾にはきか…」

そう言つて笑つた玉藻前はジュツツという音と共に殺生石にされた。

そしてその光は大屋敷から都全体へと広がり

『ギヤアアアア!!』

「おのれ狐妖怪めえええ!!!」

狸妖怪達は呆気なく消滅した。

「これで証明になりましたか?」

そう言つてにつこり笑うその者に

「ははは……今の簡単な厄払いの術でしょう……?なんで玉藻前を殺生石にして狸妖怪達を消滅させられる事が出来るのです……?」

「…貴女、私達くらいとんでもない妖怪……」

乾いた笑顔でキンコとギンコは答えた。

「ふあっ!?眩しかったけど何!?え!?大屋敷が燃えてた中寝てたの僕!?」

「あるじ様!」

「あるじ!」

「主サマ!」

「うわっ、キンコギンコこれどうし…貴女誰えええ!」

光によつて目を覚ましたクラマは、即座に反応した三人に包まれた。

後処理が一番面倒だったりする

「…もう一回整理するぞ」

全焼した大屋敷を呪術師とその式神達が建てている脇で、大頭とクラマは砂の上で向かい合って座っていた。

「今回の誘拐事件は、玉藻前が都に現れそれに対抗するように現れた狸妖怪達が勢力を広げる足掛けにしようとして起きたんだな」

「はい」

「んで…玉藻前の仲間だった狐妖怪が裏切って、玉藻前は殺生石に転じられ、狸妖怪どもは消滅したと」

「はい」

「更にその狐妖怪はお前の使役するキンコとギンコが別世界で融合した存在っていう事なんだろう」

「本人も領いてるのでそうですね」

クラマの両脇にはキンコとギンコが並び、その後ろで抱き付きながら大頭を見て頷く狐妖怪。

それを見て、大頭は溜息を吐く

「はああ…お前の使役する妖怪は凄まじいと思ってたが…なんだ別世界って…」

大頭はガリガリと頭を搔いて狐妖怪を見る

「んで…お前はクラマの式神になるんだよな？」

「はい、勿論です。その為に裏切りましたので」

そう言っつて狐妖怪はぎゅっとクラマを抱きしめる

「…んで、名前は決めたのか？」

「はい、スイコで」

「…そうか」

そのまま引っ付くスイコを見て、キンコとギンコも対抗するように引っ付く。

「あー、ここに居た！クラマ！貴方も手伝いなさいよ！」

そんなクラマを見つけてシユリはズカズカと近寄る

「ん？貴方新しく狐妖怪を引き入れたの……」

シユリはスイコを見た瞬間に構える

「…貴女何？その妖気は明らかに普通じゃないでしょ」

「…私は主サマに忠誠を誓っていますので、何かコトを起こす気はありませんよ」

「…そう。クラマ？ちゃんと手綱を握るときなさいよ、ほら手伝いに行くわよ」

そう言うシユリはクラマを掴んで連れて行く

それをキンコとギンコにスイコは見送る。

「…じゃ頑張ってくるからー」

「行ってらっしゃいませ、あるじ様」

「行ってらっしゃい、あるじ」

「怪我をしないようにですよ、主サマ」

三人はひらひらと連れて行かれるクラマに手を振る。

その姿を見て、大頭も立ち上がる

「…じゃ、俺も行くか…お前らはクラマを手伝わないのか？」

「あるじ様が頑張ると言ったので、見守りを」

「怪我しそうなら助ける」

「私はまだ警戒されているので行かない方が良いと」

「そうか。まあ見てな、大屋敷つてのは一日で建っちゃうんだぞ」

そう言うて手伝いに行く大頭を三人は見送る。

そのまま大屋敷は異常な速度で作り上げられた。

大屋敷自体も、前より少し大きくなった。

「さてと、お前ら！都は被害が出たものの大多数は無事！呪術師にも死者はなし！大屋敷は燃えちまったがこうして再び建った…」

そう言う大頭は酒甕を掲げて叫んだ

「今日は飲むぞお前らああ！」

『うおおおお!!』

こうして開かれた宴は深夜遅くまで続いた。

そして日が昇る頃

「うう…飲み過ぎた」

「子供はみんな寝てるよな…？」

「子供の呪術師達は式神達が各自部屋に送ったはずだ…くそ、頭いてえ…」

「うっぷ…大頭はどこだ…？」

「俺らがバカみたいに飲んでるうちにさっさと部屋に戻って仕事してるぜ…」

「あー…今回もシュリちゃん口説けなかった…うええ…」

「お前じゃ無理だろうが…」

そこには二日酔いで倒れる呪術師達とそんな呪術師を介抱する式神達が居た。

式神達は思う

(だらしないけど、この人も頑張って都守ったもんなあ…)

登った日の光に、二日酔いした呪術師達は目を細める

「ふー…頑張りましよっか、クラマ」

「了解…」

「二お供します主あるじ(様)」「サマ」

こうして、また一日が始まる…

満ちる犬神

何処かの山の中

ガリガリ、ボリボリと何かを喰らう音がする

喰らっていたのは前足が鎌になっているイタチ：カマイタチだ

「はあ…やっぱり不味い。まあ、弱くて狩りやすいから足しにはなるんだけどなあ」

そう言つて…その者…犬神は喰らいながら考える

雑魚と言える妖怪を幾ら喰らおうと、あの獲物の式神を殺す為には全然足りない…と

「どこかに強めで殺しやすく、喰らえば結構な力を得られる人間か妖怪…いないかな？」

犬神自身も分かっている事だが、雑魚とはいえ既に万を越える妖怪を喰らっている為、そこら辺の野良妖怪が束になってかかって来ようとも指先一つで蹴散らせる程度には強い

そして人間を求めるのも人間は狩り易く、中には一般人でありながらも霊力だけで見れば呪術師として大成するほどの素質を持つ者がいる為だ。

しかし、呪術師の頂点はそんな人間を放っておくような人物ではない為、基本的には素質ある者は皆呪術師としてスカウトされる。

「妖怪にも飽きて来たし、見つからそうな場所に来た人間を喰らおうか…それかこの体を囮にして誘い込んで喰い殺すか…うーん、悩ましい」

口元が血濡れなまま、犬神は考える

「まあ、とりあえず…近場の集落にでも潜り込むか。呪術師の手が伸びにくい場所なら全員殺して喰らえばバレる事はないし」

そう言つて犬神は、軽い足取りで山を降りた

そうして山を降りた犬神は、そのまま土が多少慣らされた道を歩く
そのまま歩くと、ちようど目線の先に集落が見えた。

「ちようどいい、あの集落の人間で口直ししよう」

そう言っつて、犬神は姿勢を低くして走り出す
踏みしめた足によって地面が割れる

目は煌々と輝き、口は寧猛に開かれ、歯は獣のように鋭い

「ああ…でも…久々だ。久々の人間だ。あの人には劣るだろうけど、
それでも人を喰らえるのは良いなあ！」

そうして、集落を囲む柵を飛び越えた犬神は

「な、なんだあ!?!」

偶然そこに居た住民の首を、鋭い爪で引き裂いた

「ごぼっ…!?!」

「んん…久々の人間の血…ああ…甘美っ…!」

手先に付いた血を舐めて、犬神は笑う

幸いというべきか、不幸と言うべきか、他の住民には気づかれてい
ない

「ふふふ…久々の人間なんだし…ちよつと食べ過ぎてもいいよねえ…
?」

そう言々と犬神は、手始めにとすぐ近くの平屋に目を向けた。

――

そして、一時間程経った

「はあ…美味しかった」

集落は見るも無惨に変わってしまった。

地面は血に塗れ、建物は壊れ、辺りには骨と臓腑が落ちている
「ひ…ぐ…」

そして、犬神の足元で涙を零し震えながら後退りをする少女が居た。

この少女が最後の生き残りだ。

「ただの集落と思っていたけど、まさか望んだ通りの者が居るなんてなあ…」

犬神はジッと少女を見つめる

「…元は死体とは言え…この貧相な体はそろそろ窮屈だし…犬神の絶滅を避ける為にも、乗り換えるかな」

そう言っつて詰め寄った犬神は少女の頭に手を置いた。

「い、いやっ…！」

「怖がる必要はないよ、すぐに終わるから」

そう言っつと、手を置いていた犬神の身体はぐらりと揺れて倒れる。

「あ…う…ぐっ…!？」

少女は頭を抑え、血濡れた地面でのたうち回る。

「あ…あ” あ…あ” あ” あ!!」

そのまましばらく、少女の叫び声が響くも少しすれば止まった。

ぐったりと横になっていた少女は、身体を起こすと手足が動くかを確認する。

「よし、乗り移れたな。それにしてもこの女子…」

そう言っつて犬神は胸を掴む

「人間は乳が大きいのを好む…けど、この胸はどうなんだろう…西瓜かなこの乳は」

むにゆりむにゆりと、揉む度に形を変える大きな胸を見ながら犬神は眩く

「あの身体は動きやすかったけど…元が脆かったし、この身体は靈力もあつて好都合…」

そのまま軽く身体を動かすと犬神はそのまま腕を組んで考える

「このくらい準備したなら…そろそろ、呪術師さんの近くに行つても大丈夫かな？」

そう言うと犬神は獲物クラマの匂いを思い出しそのまま走り出す
犬神は知らない、獲物クラマに更に化け物みたいな強さの式神が追加され
た事を

人々は知らない、犬神という妖怪は既に絶滅しているはずと
思っているから

そして偶然なのか

この日を境に、各地で強い妖怪や厄介な怨霊が現れ始めた。

外の化け物の商人、異形の運び屋

ここは都より近くにある港。

各地から運ばれて来る商品を受け入れる、都の生命線とも言える場所だ。

そんな港の日陰に、赤い外套を身に纏う。白い肌の女性が居た。

この港にて、唯一『外の国』からやって来た商人であり、『外の国』の化け物だ。

彼女の扱う商品は唯一無二であり、一介の商人から豪商、呪術師までがお世話になっていたりする。

そんな彼女は今日も日陰でぼんやりと客が来ないかと待ち続ける。そんな時、馴染みの客がやってきた。

「こんにちは…あの、前に買ったあの不思議な菓子はありますか？」

「あれ、また欲しい」

それぞれ、金と銀の尾を揺らす九尾の狐だ。

「不思議な菓子…ああ、チョコレートですか？お待ち下さい！」

そう言って商人はニツコリと笑うと自らの影に手を入れ、ゴソゴソと漁る。

ニユツと出したのは、小瓶とそこに詰まった茶色の液体…チョコレートである。

「こちらでよろしいですか？」

「…前回と同様の量が欲しいのですが…」

金の九尾は申し訳なきげにそう言う

その言葉に、商人は眉を下げて謝罪する。

「申し訳ありません、売り出してみたら豪商から名主等が欲しい！と言われ…予約済みが殆どなんです…」

「そっか…なら、仕方ない…」

しゅんとする銀の九尾に、商人は慌ててフオローを入れる

「で、ですが！今日は運が良い事に『運び屋』が来てくださいますので、もしかしたらチョコレートもあるかもしれません！」

その言葉に、二人は顔を上げる

「それは本当ですか!？」

「はい、可能性の話になるので…確実にとは言えませんが…」
そう言って苦笑する。

それとほぼ同時に、商人の影がゴポゴポと泡立つ

「あ、来たみたいですね…お二人とも少し離れて下さい」

「ん、わかった」

「了解しました」

スツと離れると同時に、商人の影から何者かが這い出て来る。

「は…今回も面倒だったな」

ゴキゴキと首を鳴らして愚痴るその者の見た目は変わっていた。

その身を黒い外套で包み、その下には真っ黒な軍服のような物を着ている。

腰には軍刀を下げ、手には白い手袋を付けている。

気怠げな真っ黒な目は商人を見つめ、次に二人の九尾を見る。

「吸血鬼さんよ、お客の数は正確に見ておくもんだぞ」

「へ?」

キョトンとする商人に、その者は溜息を吐いて指を指す。

「この二人の後ろにもう一人居るんだよ。つたく…混ざりもんとその元が居るとかどんな世界だよ」

そう溜息を吐くと同時に、二人の九尾の後ろにもう一人が現れる

「ふあっ!? 本当に居ました!」

「…何故、分かったんですか?」

金と銀の尾を揺らしながら、その存在は鋭く睨む

その視線に怯みもせず、その者はヘラヘラと笑って言う

「何、こっち側に足を踏み入れかけてるやつなんて早々見ないからな、
バレるもんだろ」

そう言ってケラケラと笑うと、そのまま商人に巨大な黒い袋を渡す。

「どっかの世界じゃ今日は『クリスマス』ってのらしいぜ、だからチョコだの菓子は多めだ。何もかもが真っ黒なサンタ様からのクリスマス

スプレゼントってな！」

そう言つてケラケラ笑いながら商人の影の中へとその者は沈んで行った。

その姿をポカンと見る二人の九尾と、その影をじつと見るその存在を尻目に、商人は商品を確認する

「あ、チョコレートは前よりも多めにありますね：買つていきますか？」

「全部ちようだい！」

ハモる九尾を見て、商人はクスクスと笑う。

しかし、その存在のみは、じつと商人を見つめて問いかけた。

「先程の者は一体何者ですか？」

その言葉に、商人はうーんと悩んだ後に答える

「：えーっと、今は『彼』でしたね：彼は、『シエイプシフター』です。外の国にも、この国にも、そしてどこであつても概念として存在する。そんな：バケモノ：？：ですね」

でも良い人：人：？：ではあるんですよ、と続けて言う商人は、チョコレートを九尾の二人へ渡し、お代を受け取る

「：まあ、いいです。目的は達成しましたし：」

「はやく、帰ろう」

「ですね」

そう言つて帰路に着く三人を、商人は手を振つて見送つた。

☆

その者：シエイプシフターは、真つ黒な世界で一人佇む。

「しかし、アレが想いが混ざつて生まれた化け物か：末恐ろしいもんだな」

シエイプシフターはそのまま歩き始める。

「つまる所、アレがどつかから越えて入つて来てる訳か：」

そのまま歩き続けたシェイプシフターは、不自然にひび割れた空間を見つける

「なるほど、ここから入って来たってか……チツ、あの世界のヤツに細工されてやがる……」

シェイプシフターがひび割れに触れようとするも、黒紫の煙が湧き上がり、その手を毒々しく染める。

手袋を引き千切るように捨て去ったシェイプシフターは、そのまま袖から新しく手袋を生やし、ブラブラと振るって呟く

「こりゃ、あの世界の奴らに自分で対処して貰うしかねえか……ま、負けちまっても別に問題はないが……」

そう言っただけでシェイプシフターは、ひび割れを放置し黒い空間の奥へと歩いて行った。